

パート 6

科学技術・イノベーションと社会

(裏白紙)

Q616. 科学技術・イノベーションと社会のパートの質問に関連する内容について、ご意見をご自由にお書きください。

- 1 資金のルールを守ることは重要だが、一人の過ちを全体責任に結び付ける考え方は言語道断。考え方が古すぎて話にならない。こんなことで世界に開かれた大学ができる思っている文科省は頭が悪すぎる。ヨーロッパの鉄道の検札のように、全員をチェックするのではなく、無作為抽出でチェックし、違反者にはペナルティーを10倍額払わせるというシステムを導入すべき。(大学の自然科学研究者,第1G,理学,教授、部局長等クラス,男性)
- 2 現在のほとんどの公募型国際研究は、結局のところ日本側が得をして相手に負担をかけるだけとなるため、応募を躊躇する。スタッフや学生が短期間遊びに行くだけの国際研究はやめるべきで、派遣するのであれば学生や教員を1年くらい派遣させられる(相手にとってもメリットとなる)ようにすべきと考える。(大学の自然科学研究者,第1G,理学,教授、部局長等クラス,男性)
- 3 日本の科学技術の卵は、大学院生である。その大学院生の3-4割が博士課程に進学し、日本を支えるという意欲が芽生えることを期待したい。そのためには、国が安定して博士課程の学生を補助する制度を確保するとともに、多くの企業が博士人材を雇用し、また雇用面でも優遇してもらう必要がある。多くの大学生が修士課程を修了後に企業に就職し、安定な生活をしたいと考えるのは普通である。就職先の企業が世界で活躍できるものであれば大学教育がさらに活用され、より素晴らしい国際人が育つと感じる。学生、企業に国際性をつけることが必要と考える。(大学の自然科学研究者,第1G,理学,教授、部局長等クラス,男性)
- 4 イノベーションという言葉が安易に使われすぎです。革新的な考えが出てくることで科学は(そして最終的には社会も)大きく変化しますが、それはあくまでも多くの人が地道な積み上げをしている上に出てくることであって、それなしでイノベーションを求めてはいけません。社会との関係性・意義も、例に挙がっている少子高齢化や気候変動などの現在直面する問題に対してのみ評価してはいけません。社会的意義は最終的には歴史が判断することであって、今の私たちの認識では社会に直接関わらない問題が、将来の鍵かもしれない、誰も予想はできません。(大学の自然科学研究者,第1G,理学,教授、部局長等クラス,女性)
- 5 国際的な連携も重要だとは思いますが、日本国内の特に学生の研究支援を充実させてほしい。(大学の自然科学研究者,第1G,理学,助教、研究員クラス,男性)
- 6 社会との連携をうまく進めるため、研究者・技術者だけでなく、“繋ぐ人材”の育成も急務。博士取得者のキャリアパスの一つとしてもそういった道でのロールモデルを見せていくことが望ましい(大学の自然科学研究者,第1G,工学,教授、部局長等クラス,男性)
- 7 国際化に伴って中国をはじめとする共産圏からの留学生受け入れが増加している。半導体技術や高度な生産技術は、軍需や社会インフラ整備に直接的に関わる事から、国際化の名のもとに技術流出が加速していると感じる。(大学の自然科学研究者,第1G,工学,教授、部局長等クラス,男性)
- 8 研究インテグリティも、国内での運営資金とリンクしていると感じる。(大学の自然科学研究者,第1G,工学,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 9 問6-01に関して、研究コミュニティ(学会等)は、科学技術・イノベーションについての国民の理解を促進する活動に積極的ではありませんが、これに積極的であればあるほど、研究時間が削られ基盤研究が弱くなるように思います。もちろん理解の促進は重要ですが研究者に何もかも求めると研究力の脆弱化につながると感じています。(大学の自然科学研究者,第1G,工学,准教授、主任研究員クラス,女性)
- 10 国際共同研究の推進にあたり、共同研究先との制度の不一致(年度単位の予算措置等)は研究の円滑な推進に大きな影響がある。例えば問題が生じてスケジュールが遅れ気味でも年度単位の予算措置によるものでは予算の繰越等で対応することが難しい。(大学の自然科学研究者,第1G,工学,助教、研究員クラス,男性)
- 11 学会の社会への情報発信や社会的な意義を考慮した取り組みについては、運営資金の兼ね合いもあり様ではないと思いますが、うまくいっている例もあると思います。しかしながら、SDGsの観点からもより社会からのニーズを吸い上げ研究活動に活かす場があっても良いように思います。分野横断型の研究を進める上で、より異分野の研究者が自然にコミュニケーションできる仕組み(活動の余裕や場の確保)があると良いと思います。(大学の自然科学研究者,第1G,工学,助教、研究員クラス,女性)
- 12 総合知の活用について、異分野融合、特に文系・理系研究の連携に難しさを感じます。主に、お互いへの認識(研究内容、そしてもっとも重要なのは人脈)が足りないのが原因に思います。たとえば、若手研究者・中堅研究者向けの、連携を促す取り組み(総合知セミナーや、人を知るイベント)をしていただけるとありがたい。(大学の自然科学研究者,第1G,工学,助教、研究員クラス,女性)
- 13 例えばJSPSの海外事業における予算などは、制約が多く使いづらい。また国際共同研究費については、若手研究者中心とする予算配分ではなく、中堅の研究者が築いたネットワークを維持するための予算もあると良い。異分野が協働する取組は非常に活発に取り組まれている。(大学の自然科学研究者,第1G,農学,教授、部局長等クラス,女性)
- 14 たとえば、JSTさきがけの特許がJST側に帰属することで、アメリカにいる若手研究者は大学事務とトラブルになる事案が多発した。このような国際共同研究を行う上で律速になるルールがいくつか設定されている。加えて、これがものすごく重要なことだが、日本が科学の潮流を産むためには、cell nature scienceのようなジャーナルエディターを巻き込むシステム作りが必要。アメリカはこの立て付けがものすごくうまい。(大学の自然科学研究者,第1G,農学,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 15 国際連携においては、技術流出との兼ね合いにおいて難しさを感じている。(大学の自然科学研究者,第1G,農学,准教授、主任研究員クラス,女性)
- 16 社会に対するインパクトなど、特に地球環境活動などに対する意識がもうすこし高まっていいのではないかと、日本では、政治や環境に関して話し合う機会がとても少ないと感じる。(大学の自然科学研究者,第1G,農学,助教、研究員クラス,女性)

- 17 本パートは非常に重要だと思います。私自身は、患者家族会と交流を深めながら研究活動を行っていますが、業績評価にはつながらないですし、そんな時間があるなら実験して論文たくさん書いたほうが良いと考える同僚も多いです。異分野交流も国際連携も、科研費(学術変革や国際共同など)をとるために、形式的にやっている方も多くみかけます。(大学の自然科学研究者,第1G,保健,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 18 近年の輸出管理等の規制が強くなったことが、国際化を大幅に阻害しています。国外研究者と意見交換を行うだけでも事前の手続きが必要になるなど、膨大な事務手続きが生じてしまったため、これまでのような気軽な国際交流ができなくなっていることに危機感を覚えています。安全保障上の理由は理解はできますが、研究者や留学生の交流など、人的な信頼構築を通じた平和構築/安全保障外交も意識してアカデミア活動での規制の方法を再検討していただけると助かります。(大学の自然科学研究者,第1G,保健,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 19 国際連携や国際共同研究の推進に向けて研究者は高い意識をもって取り組んでいます。それに対応できる事務方のサポートがまだ十分とは言えないように思います。例えば、海外の研究機関では事務職員が行う作業を国内では研究者自身が行う必要があり、研究者が国内外の事務職員と連絡を取り合って仲介しながら進めることがあります。(大学の自然科学研究者,第1G,保健,助教,研究員クラス,男性)
- 20 学会も細分化しているので、完全に異分野の人と接する機会はほとんど無い。「研究者」という広い枠組みで分野も国も問わずに交流できる場があれば良い。(大学の自然科学研究者,第1G,保健,助教,研究員クラス,女性)
- 21 国際共同研究をするためには研究資金が必要になるが、日本の研究費は日本の研究者しか使用できないため、海外の研究者にとってのメリットが少ない。そのため、海外研究者が日本人との共同研究に消極的になる。(大学の自然科学研究者,第1G,保健,助教,研究員クラス,女性)
- 22 大型国際共同実験・研究の場において、多くの国は政府のFunding Agency(資金調達担当者)が直接共同予算の折衝などにあたっており、研究者を挟んで行う日本のやり方と異なる。このような研究者が肩代わりしている(専門でない)仕事を見直していくべきである。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,教授,部局長等クラス,男性)
- 23 社会的課題というのが何を指しているのか曖昧ですが、社会的課題はありとあらゆるものです。しかし、この質問の趣旨はそうではないようなので「わからない」と答えました。また、共同するというのが簡単なことではありません。無理して共同するのではなく、置かれた立場でベストを尽くすのが一番でしょう。ただ、私個人はもう少し他部局の方々と交流したいのですが、そう言った時間はこちらにも先方にもないのが残念です。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,教授,部局長等クラス,男性)
- 24 研究者の異分野交流や国際化は進んでいると思われる。ただし、国や組織からの支援は限定的である。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,教授,部局長等クラス,男性)
- 25 国際的な活動に関するサポートを受ける組織整備は十分かと思いますが、具体的に推進・支援する制度は少ないように思います。それも学内の業務が多すぎ、特に若者が疲弊しているため、国際化に向かう余裕がないように感じられます。大きな大学では、役割分担が大切ですので、社会と密接に連携する活動と、もっと知の基盤を深く掘り下げる分野と、区別した方がよいように思います。その点私の所属する部局は不十分な点も多いように思いますが、役割として適切かどうかは考えなくてはいけないと思います。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,教授,部局長等クラス,男性)
- 26 学会は努力して、研究環境を良くしようとしている。研究コミュニティは国民の理解を得るために尽くしていると思う。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,教授,部局長等クラス,女性)
- 27 614については、他の教員(研究者)と意見交換したことがないので、不明です。したがって、「分からない」を選んでいました。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,教授,部局長等クラス,女性)
- 28 前項と関連するが、研究者の立場に理解が得られにくいのはこのような研究者側の発信が少ないことも影響していると考えられ、反省すべき点だと考えている。このような状況は一朝一夕で解決するとは考えにくく、今後数十年の研究者の持続的な活動が重要だと思われる。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 29 海外での観測に携行する物品は輸出に当たりますが、その取扱いに関するサポートがあると助かります。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,准教授,主任研究員クラス,女性)
- 30 異分野の協働は、重要ではありますが、そのための予算がうまく機能しているのかわかりません。日本の制度は、国際共同研究を推進するには、改善が必要な部分が多いと思います。〇〇大学は比較的取り組みが進んでいると思います。(大学の自然科学研究者,第2G,理学,准教授,主任研究員クラス,女性)
- 31 地域やコミュニティとの連携は、当然ながらコロナ禍で大きく減退した。今回の回答は、コロナ禍前の状況に基づいている。この点は、アンケート結果の誤差の原因になる可能性がある。(大学の自然科学研究者,第2G,工学,教授,部局長等クラス,男性)
- 32 本パートに関しては多くの取り組みがなされ、成果が上がっているが、さらに発展する余地も大きくあると思われる。(大学の自然科学研究者,第2G,工学,教授,部局長等クラス,男性)
- 33 問6-01,02については、機械工学は社会との連携の上で成り立つ学問であるので、関係学会の社会貢献は非常に高いと思います。問6-03, 04, 05, 06については、私の所属研究所では100%Yesです。分野融合は機関の目的の一つに掲げられており、所長のいつも口にしてます。研究所では常に研究の社会的なrelevanceや研究成果の技術レベル(TRL)を問われています。ただ、日本全国となるとそうでもないと思うので低い点数にしています。問6-07については、国が違くとギャップがあるので、契約書の作成には、法務も含めて、事務部門の多大な協力が不可欠で、実際にそれをしてきています。国際契約の複雑な過程を見ると、日本全体では私の所属する研究所・大学のレベルには到底及んでいないと思われるので点数は低くつけています。(大学の自然科学研究者,第2G,工学,教授,部局長等クラス,男性)
- 34 私立大学の場合、授業が毎日のようにあるため、海外出張が難しく、外国のグループと購入することが難しい。さらに、コロナによる影響もあり、海外出張がほとんどできない状況になっていることもある。(大学の自然科学研究者,第2G,工学,准教授,主任研究員クラス,男性)

- 35 SATREPSなどを通じ、異分野連携・協働の取り組みに応募・参画できている(大学の自然科学研究者,第2G,工学,准教授、主任研究員クラス,女性)
- ・日本は研究資金の利用ルールをもっと緩めるべきだと考える。極端な例だが中国では研究費を高額な飲食費などにも自由に使用できるため欧米の多くの有力研究者たちも中国で研究するようになってしまっている。とくに非実験系の研究は人的交流が非常に肝心で、このような状況が日本が遅れをとっている遠因になっていると強く感じる。実際日本の高名な研究者たちも中国に移籍し始めてしまっている。・私自身、海外研究者から研究成果の盗用・論文の剽窃をされた経験が複数回あり、周囲にもそのような被害にあった研究者が複数名いる(私が所属する大学に限ったことではなく日本国内全般の話である)。多くの場合は研究者個人が研究時間を削って対応しても泣き寝入りせざるを得ない。組織的な対策が急務であると感じる。(大学の自然科学研究者,第2G,工学,准教授、主任研究員クラス,女性)
- 36
- 37 建築分野の国際的交流は、地震大国である我が国においては構造や工法がそもそも異なるため、交流を行っても理解を得られない場合が多い。その点を考慮しないで回答するのは難しい。たとえば「必要性を感じるか」などの解答欄があれば(大学の自然科学研究者,第2G,工学,助教、研究員クラス,男性)
- 38 社会的課題に近い研究を行っているので、それを考慮した課題設定は行いやすいと感じている。研究活動の国際化に伴って生じる利益相反・責任相反のリスク要因に対して、大学から講習会やさまざまな情報を提供してくれているので、自分自身では十分意識をしていると考えているが、いまだにそのリスクに無頓着な研究者もおり、危険性を感じることもある。(大学の自然科学研究者,第2G,工学,助教、研究員クラス,男性)
- 39 あまりにも日本の閉鎖的な研究費執行ルールのせいで、外国人研究者らと研究を進めるのが極めて難しい。予算規模もはるかに小さいので、一緒に研究プロジェクトを応募しようにも、誘うことをためらう。(大学の自然科学研究者,第2G,農学,教授、部局長等クラス,男性)
- 40 研究は個人の興味であり、とがって特化していくことに意味があるし、そのことがドライビングフォースとなる。総合知とか市民との協調とか、ピントが外れていると思う。それが必要と思う研究者が、その方向に特化すればよいことで、そんなことに興味がない研究者は、そのままで良いと思う。(大学の自然科学研究者,第2G,農学,教授、部局長等クラス,男性)
- 41 学会レベルでは、社会との連携を意識した取り組みは進められていると思う。「総合知」の有効性が、長らく期待されていたが、万能ではない。成功例となるようなモデルケースを提示すべきである。すなわち、「総合知」が有効な課題とそうではない課題についての、情報がそろそろ提示されても良いのではないか。研究者個人レベルでの国際連携は進んでいるが、他国間での研究費利用、知財、利益相反・責務相反のリスクに関して、制度やサポートが不十分であると感じる。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 42 研究者は、自らの研究と社会的課題(少子高齢化、気候変動、感染症等)との関係性――基礎研究においては、上述の質問は頭の片隅にあれば十分だと思います。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 43 国際連携が欧米だけでなくアジア、アフリカなどの全世界に拡大している今日において、「国際的な慣行」の意味するところは一義的ではない。したがってそれと比較して適切かという判断は難しい。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 44 国際連携において、ダブルディグリーなどの学位システムの中で、海外の大学の制度の差により学術発表などに大きな課題が生じている。特に中国との連携においては、投稿できない(中国政府が認めていない)学術雑誌などがあり、国際共同研究の面で様々な問題を生じている。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 45 自らの研究と社会的課題(少子高齢化、気候変動、感染症等)との関係性や、自らの研究の社会的な意義・価値を十分に考慮しつつ、研究に取り組む必要が、基礎研究者にどこまで求められるべきかは、個人的には疑問である。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,女性)
- 46 社会的課題解決のために、分野横断的とりくみが必須である。しかし、社会全体がいわゆる理系、文系にわかれており、例えば日本学術会議の第1部、第2部間の相互交流もないのが現状である。医学、医療という人を対象とした分野には、人文科学的視点からの医学教育、研究が必要であると考えている。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,女性)
- 47 国際共同研究に使える外部資金を獲得したとしても、知的財産権の日本への帰属が問題となって、何度も折り合いがつかなくて執行できない。パイドール法などに準じて、日本政府の柔軟な対応を望む。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,教授、部局長等クラス,女性)
- 48 わが国で研究者と市民との間に大きなギャップがあると感じるのは、研究者自身が研究を通して社会還元するという意識が低いと思われる。例えば、学会や講演会などで市民参加型イベントを行う際は研究者が上座から一方的に発信を行うという形がほとんどであり、市民や社会からのニーズを研究活動に積極的に取り込んでブラッシュアップするという例をわが国では見たことがない。欧米では研究者コミュニティと政府・地域・民間とのコラボレーションがより効果的であることが、高い研究成果につながっていると思われる。これは、わが国には欠けている、大学が社会に貢献できる人材を輩出することや、民間企業との活発な人材交流を行うことと密接な関係にある。これらの問題の根底にあるのは、わが国の多様性の欠如であると考えられる。その原因は、初等教育の時点から服装・髪型などが理不尽な校則で制約されており、学習内容の発表形式などは統一的であって創意工夫の余地に乏しく、「外れ値」を好まない風潮など、わが国のシステムに根深く存在している。したがってわが国からイノベーションを次々と起こすのは極めて難しい状況であるが、大小の問題を特定して個別に改善していく取り組みを地道に続けていけば、状況は徐々に好転していくと期待する。科学技術のイノベーションに関して比較的短期的に効果を期待できる方法としては、文系・理系など異分野間の共同研究や、地域協力型の研究を賞し、助成金を与えることが考えられる。これはそれほど高額である必要はなく、まず若手研究者を対象として行うのが効果的と考える。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 49 本学ではCOIに関する報告書を年に2回提出しています。特に、民間財団から助成金を獲得した場合は、COIに該当するか精査されます。私の所属する学会では、国際化を意識してアブストラクトや発表資料を英語で作成しています。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 50 社会的課題に直結する研究分野であると認識しています。ただ、それが、研究手法や分野として、広く一般的ではないことから、研究力が低いまま、現場の専門職が研究を必要としなさすぎる土壌で経過しており、当該分野の研究がなかなか芽が出ない状況です。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,准教授、主任研究員クラス,女性)

- 51 社会的課題(少子高齢化)に直面する現在,育児支援を充実させ,なるべく多くの研究者が安心して仕事に取り組めるような社会を目指すべきである。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,准教授,主任研究員クラス,女性)
- 52 全体を通して,十分か不十分かという質問自体が不適切と思われる設問が散見される.十分かどうかは個人の考えによるところであり,どの程度実施されているかとは関係がない.あまり実施されていないが十分と感じる場合もあれば,ある程度実施されているものの,まだ不十分と感じる場合もある.本調査が政策決定に反映されることを鑑みると,不十分と回答した際に,よりそれを促進するため政策決定がなされることが想定され,それによる悪影響が懸念される場合には,率直な回答を躊躇してしまう。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,助教,研究員クラス,男性)
- 53 MEXTが制定する輸出管理体制によって,国際共同研究がしにくくなってしまった.この規制について知らない研究者も多いと思われる.もっと研究者に周知させること,さらにこれに関する申請を円滑化する専門人材を研究機関において欲しい。(大学の自然科学研究者,第2G,保健,助教,研究員クラス,女性)
- 54 所属する大学は,きわめて地域ローカル色の強い地方大学であり,国際化については,まったく進んでいない.しかし,これは日本の地方大学全般が抱える問題といえる.ほとんど世界的に知名度のない地方大学にどうやって海外留学生を誘致するのか,海外研究者とのコラボレーションを図るのか,現状は研究者の個人的な伝手を使ったつながらり以上のことができていない。(大学の自然科学研究者,第3G,理学,教授,部局長等クラス,男性)
- 55 異分野連携の研究提案に対して,複数分野から有識者による評価するのは必要です.異分野連携の研究提案への評価(研究費の審査制度での対応など)が不十分であると感じています.それは,研究者の異分野の連携による取組の意欲が低下しているという状況につながっていると思われます。(大学の自然科学研究者,第3G,理学,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 56 海外,とくに米国と比較した場合,獲得研究費が,教員の給与に反映されないシステムでは,教員のモチベーション向上には上限があると感じる.具体的な頑張るメリットがなさ過ぎる.そのため,それを見ている若手や学生の憧れも生まれません.一方,融合分野の研究課題や開発,という言葉のみが一人歩きし,実質的な内容が不可解かつ造語が目立ち,その実,実態はこれまでの体型とあまり変わらないことが目立つ.正しい競争原理に則り,正しい研究を世界と戦い,正しく配分していれば自ずと研究内容は科学の進歩にともない,融合分野になるのが,現在の世の中である.格好をつけた研究課題やタイトルが好まれる風潮は,果たして誰のために生じているのか,議論が必要ではないかと感じている。(大学の自然科学研究者,第3G,理学,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 57 地球科学は防災とかかわる部分があり,ある程度他分野との協働を行っている面がある.自分自身も他分野とのネットワークがある.ただ,国際的な連携については,英語力の低さから国際的な共同研究は少ないと思うし,そのような資金も科研費の通常の枠組みでは取れず,国際共同研究が進めにくい現状がある.また,国際化のリスクに対する意識はある程度あるとおもうのだが,それが逆に壁となって国際化を進められずにいるように感じる。(大学の自然科学研究者,第3G,理学,准教授,主任研究員クラス,女性)
- 58 「総合知」を活用できる研究者というのはいかなり限られている.以前は幅広い知識と興味を持つ研究者が多かったが,競争が厳しくなり,専門分野の研究で業績を残すことに汲々としてざるを得ない現況では,そのような人材の割合が急速に減っているように思う.異分野協働のポーズを取ってみても,適切な人材が適切なやり方で行うのであれば大した結果は生まれません.私の属する学会は異なる複数分野の研究者で構成され,異分野間の交流があつて能力のある人も多いが,協働とまではなかなかならない.「挑戦を是とする人材」もそうだが,大学の取組でどうにかなる問題ではない。(大学の自然科学研究者,第3G,理学,准教授,主任研究員クラス,女性)
- 59 税を財源にしている以上,国民の理解を得るということはある程度は仕方のないことだが,国民が一方向的に研究者に求めるものでもなければ,研究者が我が物顔で研究費を使っているものでもないと思う.すぐに役に立つものではないことを理解してもらふ必要があると思う.無理に社会と結びつきを作ろうとして,自分の思っている本当の興味とは別の話をしなければいけないような雰囲気がある。(大学の自然科学研究者,第3G,理学,助教,研究員クラス,男性)
- 60 国産の技術化についての議論については,難しい点が多くありますが,国内の研究ネットワークのみに研究を頼る時代は終わりつつあり,今後はこの傾向がますます強くなると感じます.こういった背景からも,日本が国際社会で果たす役割について再考する必要があると感じます。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,教授,部局長等クラス,男性)
- 61 外国人教員が多く所属しており,その教員の出身国からの資金提供(民間含む),学生受入や,その出身国の企業への技術提供が常態に行われている.制度上の問題はないが,例えば日本の国税である科研費で開発した技術が日本企業に還元されず,海外流出する懸念はないか,将来的な心配をしている。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 62 一般的に,国際的な研究枠組みで研究できる研究者と,そうでない研究者の二極化が進行していると思う。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,准教授,主任研究員クラス,男性)
- 63 国際的に成果を発表することは大切であることはわかりますが,国内の発表よりも評価される状況が良くないと思います.公的機関から獲得する資金から得た研究成果を海外に流出させるほうが評価されるのは間違っていると思います.また,思考が母国語で行うことがもっとも良いと思いますし,海外に成果を発表することが重要なのであれば,国内の論文を英語化にすることを国が積極に行ってもいいのではないかと感じています.加えて,国内の学会組織が積極的に英語の論文集を作るなりして,海外からの研究成果や資金を国内に還元できるシステムを作るのも大切だと感じます。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,助教,研究員クラス,男性)
- 64 大学や所属する学会では国際化に関しては十分に取り組みを行っていると思う.一方で社会との関係性や総合知の活用は不十分である.これは国際化は業績として取り扱われるが,社会との関係性,総合知の活用は業績に直接関係なく,人と時間を割ける余裕がないところが大きいと思う。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,助教,研究員クラス,男性)
- 65 研究内容を発表する無料のワークショップなどが開催されている.参加者は研究者が多いようなので,さらに専門の研究者以外も参加しやすくなれば良いと思う.知財・標準化に積極的に取り組み,競争力を伸ばすことが期待されている分野であり,そのための支援が進められている.同時に社会実装も重要視されている。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,助教,研究員クラス,女性)
- 66 最近では,学際的という言葉がはやるようになり,基盤よりも異分野との交流を優先する傾向がみられます.基盤がしっかりした人同士がそのような組織をつくり,研究をすることはよいかもしれませんが,学際的な取組が本当に解決できることがあるのか疑問に思うこともあります.会社でも,管理職に進む道と研究者を貫く道がある(ダブルディグリー)ように,連携が向いている人に向けた取組と,そうでない人に対する取組があつてもよいのではないかと感じています。(大学の自然科学研究者,第3G,工学,助教,研究員クラス,女性)

- 67 SDGsに対する世界的なムーブメントの成功により、今後、植物科学分野においても新たな価値が創造され、応用技術の社会実装が大きく進むと期待している。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、教授、部局長等クラス、男性)
- 68 研究インテグリティに関しては遅れている部分が多いと思います。研究者にとっては苦手な分野でもあり、サポートする体制が必要だと思います。私達の分野でも遺伝資源の国際的規約など難しく、研究を諦めざるを得ない部分が多いのが現状です。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、教授、部局長等クラス、男性)
- 69 国際共同研究を行うためのサポートは、全く不十分です。ABSに関する手続きや研究費の配分などもすべて教員が行わなければならない、海外の研究者に驚かれます。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、教授、部局長等クラス、男性)
- 70 科学に関して国民に説明し、興味を持ってもらう活動は大分進んで来た。国際連携もコロナ下にしては、できる限りの事は実施されていると考える。しかしながら、やはりコミュニティ活動や国際的な活動はコロナに最も悪影響を受けている。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、教授、部局長等クラス、女性)
- 71 本パートのうち「総合知」について意見があります。日本の中等教育から高等教育に、文系と理系を分ける悪しき伝統があります。これを廃し、自然科学分野についての国民全体の知的レベルを引き上げれば、総合知の機運は自ずと高まると思います。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 72 努力はしているが研究コミュニティの発信力は不足しており、教育・研究への投資が国の未来ひいては自らの生活向上につながることを理解してもらう必要がある。実績・エビデンスによる評価や発信に偏りすぎ。可能性への投資を促進する。それなくしては研究資金の増額は難しい。社会的課題への貢献や未来像などを会談形式やシンポジウム形式で興味深く話をしてSNSなどを通じて発信する仕組みを作る。そのためには〇〇〇氏や〇〇〇氏などと面白く会談、解説できる広告的、伝道師的な(研究)者や研究報道官(文科省)も必要。研究活動の国際化についてはリスク、利益相反もあるが、外国人研究者の受け入れや彼らとの交流が減ることはデメリットのほうが大きい。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 73 学会活動としては社会や国民への貢献はしていると考え。総合知についてはほぼ分野外の専門家との共同の場がない、国際連携は不十分であると考え、自身も国際共同研究等に関わる機会がない。(大学の自然科学研究者、第3G、農学、助教、研究員クラス、女性)
- 74 研究者にすべての作業を課することは無理があると思います。それらを支援する組織、しくみが必要だと思います。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、教授、部局長等クラス、男性)
- 75 「総合知」の活用：所属している多くの学会については、まだまだ不十分な状況ではないかと思う。ただ、「異分野協働」をどの範囲でどの程度ととらえるかにもよるが、ある研究会においては、基礎系研究者と臨床系研究者(医師を含む)が一堂に会して年次集会を開催している(ちなみに、大会会長も基礎系と臨床系で隔年持ち回りで実施されている)。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、教授、部局長等クラス、男性)
- 76 国際共同研究を行っているが、慣習や研究費の取扱いがその国の事情に左右されるところがあるため、大学には柔軟に対処してもらいたい。そのために、間接経費を使ってほしいとAMEDからは言われるが、本学の場合は、財政が厳しいからという理由で間接経費がかかってこない。また、申請時には、大学の自己資金で助教などを雇用すること、AMEDから要請されたが、実施されていない。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、教授、部局長等クラス、女性)
- 77 本項における質問は、質問というより要望のように感じる(笑)。温故知新、異分野融合、国際共同は大変重要な視点であり、その中で知財の取り扱い(どちらかと言えば共有化ですが)が課題となるのは明らかである。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 78 知財管理は、研究者個人に委ねるのでなく、論文や学会発表などで判断して大学側からいくつかの選択肢を提案して選択できるような体制を取って欲しい。正直、研究のことしか頭になく、この事項は私自身少し知識が浅く、サポートして欲しい。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、助教、研究員クラス、男性)
- 79 私自身の研究分野については、教育や福祉分野との連携が必要であるが、現状連携できているとは言い難い。また、セクシュアリティ教育(性教育)についての研究は実態把握にとどまることが多く、その先の具体的方策に繋がっていないため、他分野との連携は必須と考えている。また、国際的には日本は遅れている分野であり、諸外国での取り組みに追いつくような実践的な活動に繋がるためには、教育への反映が必須であり、国としても取り組んでいくべき分野と考えているが、そこが一番難しいところである。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、助教、研究員クラス、女性)
- 80 コロナにより、現在は国際連携が厳しい状況である。アフターコロナでは以前以上に国際化が進むと思うため、今のうちに利益相反・責務相反のリスク等をしっかり周知する必要がある。(大学の自然科学研究者、第3G、保健、助教、研究員クラス、女性)
- 81 研究は社会的な問題を解決するために行なうものだけではない。社会的な問題を解決するための研究は、それが悪いとは言わないが、底が浅く、本当には役に立たず、将来性がない、消えていく研究が多いように見受けられる。(大学の自然科学研究者、第4G、理学、教授、部局長等クラス、男性)
- 82 このパートで聞いていることをあまり研究者に強制しないでもらいたい。時間がかかる割に研究へのフィードバックが少ない。(大学の自然科学研究者、第4G、理学、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 83 国内・国外の区分けに何の意味があるのかが不明。(大学の自然科学研究者、第4G、工学、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 84 国際連携を推進するため、地方大学では形骸化していると思われるサバティカル制度を実際に使える制度として見直し、若手だけでなく中堅以上の研究者も一定期間海外で研鑽を積み、海外での研究の最新の流れを取り込む必要があると思う。(大学の自然科学研究者、第4G、工学、准教授、主任研究員クラス、女性)

- 85 社会の持つ潜在的なニーズに合わせて新しい科学技術が生まれた際にイノベーションが起こると考えられる。そのためには行政指導の産学官のコラボ窓口を作ることが良いのかもしれない。例えば、互いに専門や募集する領域を登録してマッチする組を紹介する枠組みを行政によって作成してもらうなどである。この枠組みには海外企業も含めることが、国内外の資金循環、若手研究者の育成や日本の研究力のアピールという点でも良い。ここでは産官で若手研究者を複数人抱えられるほどの資金をあらかじめ用意してもらい、継続的な資金提供には学会発表件数、論文数、特許数などの成果報告を求め、継続年数が若手研究者の実力を示すと社会的に認識されるようになれば人材育成にもつながる。(大学の自然科学研究者,第4G,工学,助教、研究員クラス,男性)
- 86 日本の研究費では、研究費を給与に回すことが叶いません。学生に日当を出すこともできなかったはずで、これは、特に途上国の若手研究者と共同研究を行う際に、優秀な人材と組むうえで非常に不利であると思います。(大学の自然科学研究者,第4G,工学,助教、研究員クラス,女性)
- 87 国際共同研究や共同調査をしていて、いつも悩ましいのが、必要な交流事業の飲食費の計上ができないことです。我々が調査で出向いたときは、研究者間や組織長、自治体や企業との交流事業が、先方負担で行われるのに対し、日本で開催するときは、飲食費は別計上し、先方に負担いただくような形を取らざるを得ず、「日本だからね、しょうがないよね」と思って頂いていることが心苦しいです。親しい研究者間ではこのような相互理解(あきらめ)が生じますが、新しいネットワークを築こうとする際は、ボトルネックになっています。海外では、研究費や運営資金のうち、一定額を国際交流費として飲食費も計上されているようです。また、海外の大学では学科や研究室単位で共有のクレジットカードがある組織も有り、日時や店舗、人数などの記録もとれるようになっているようです。少しずつ改善されることを願っています。(大学の自然科学研究者,第4G,工学,助教、研究員クラス,女性)
- 88 より一層、研究コミュニティ間での協調性ができることを望む。(大学の自然科学研究者,第4G,農学,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 89 制度・仕組みは十分だが、研究シーズの企業導出や国際共同研究に対応できる人材が少なすぎる。(大学の自然科学研究者,第4G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 90 学会は既得権益を守ることに固執することなく、社会全体へ貢献する科学技術の意義について意識し、学術的動向の流れを作るべきである。(大学の自然科学研究者,第4G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 91 「社会的課題」を要求すると、流行りの研究(後追い)を推奨することになるではないか。(大学の自然科学研究者,第4G,保健,教授、部局長等クラス,男性)
- 92 国際共同研究、ここまで国内と国外の研究環境の差が激しいと、共同研究:利益関連でも、優秀な人材でも、外国に吸い取られるのは仕方ない。いつまで、海外に行かないと一流の研究ができない状況が続くのか。増額ももちろん、科研費を含めた評価体制の組み直しも必要。(大学の自然科学研究者,第4G,保健,教授、部局長等クラス,女性)
- 93 現所属組織では国際共同研究を目にしないので、不明です。(大学の自然科学研究者,第4G,保健,准教授、主任研究員クラス,女性)
- 94 私の所属する学会では、高校生を招いた年会の開催や情報発信など、適切に社会貢献に取り組んでいると感じる。また、社会的課題(少子高齢化や新型コロナウイルス感染症など)に対する取り組みが積極的に行なわれている。学会や研究者個人などでは積極的な国際連携が行われているが、大学組織としての取り組みが不十分であると感じる。本学(地方私立大学)では、利益相反・責務相反のリスクに対する取り組み(説明会や勉強会、委員会の設置など)は行われているが、それらを熟知した(知的財産マネジメントのできる)人材や部署がなく、研究者個人が対応している状況である。(大学の自然科学研究者,第4G,保健,助教、研究員クラス,男性)
- 95 国際化は着実に進んでおり、共同研究なども実施しやすい環境になってきている。一方で、安全保障などの問題もあり、(特定の国では特に)共同研究の自由に行えるという状況ではない。バランスを持った国際化が必要と考えるが、現時点で、制度や運用が明確でない部分も有り(外国の慣行と異なることも含む)、契約などが遅れ、契約が遅れるといったこともある。科学と社会は切り離せない重要な関係であるという意識は研究者全体に浸透してきていると感じる。しかし、一方で、研究機関・法人の活動となるとまだ不十分であり、ある程度柔軟な活動が可能な学会などへの期待は大きい。(国研等の自然科学研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 96 昔に比べると、一般の人たちに向けた情報発信に関して、研究者は非常に努力するようになってきていると思う。一方で、国際的なルールや研究上関わってくる法律などについて、日本の研究者は知らないことが多すぎる。もっと勉強するなり、情報の浸透を図るなりしないと、非常に危険。〇〇【公的研究機関名】はかなり取り組みが進んでいるが、大学は本当に悲惨な状況でかなり危険。(国研等の自然科学研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 97 気候環境変動の第一線で、社会と科学の結び付きを高く意識した研究を進めています。国内の仕組みで、国際スタンダードを標ぼうしているとは思えない側面があり、国際連携を阻害している。具体的で恐縮ですが、<https://www.jsps.go.jp/english/e-ippan/index.html>JSPSの海外からのポストドク応募のページで、historyが延々と書かれていて、スクロールしないと必要な情報が出てこない点は改善が必要です。別のところでも書きましたが、同規模の内容の研究開発プロジェクトの予算規模を国際比較すると、日本は欧米の1/3以下ではないか。中国や韓国と比較しても1/2以下と感じる。検証してほしい。国際連携の阻害要因である。恥ずかしくて外国の研究者を誘いにくい。(国研等の自然科学研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 98 独法に所属しているため、科学技術・イノベーションが重要であることは十分に理解し、私自身もおおいに実践しているが、ここ5年ほど、社会的意義が強調されるあまり、基礎研究が軽視されているように感じる。あらゆる分野で基礎研究が大事にされないと、イノベーションに繋がる研究成果も先細りになると考える。(国研等の自然科学研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 99 情報輸出に関して知識のない研究者は多いようにみうけられる(国研等の自然科学研究者,教授、部局長等クラス,女性)
- 100 最近ではパフォーマンスに走って目立つことで研究資金を得ようとする人が現れ、日本の研究力低下につながっている。パフォーマンスのために研究費を使う(何百万円も使って模型やアピール動画を作ったり、独自のパフォーマンスイベントを開いたりするのは禁止した方がいいのではないかと。そもそもプロジェクトの評価軸として、一般社会へのアピールのような項目を入れるべきではない。それとは別にサイエンスコミュニケーターの育成を進めた方がいい。国際共同研究で契約書を交わしたり、サンプル交換に書類作成や事務手続きに時間をかけるようになった。重要なことだと理解しているが、面倒なので国際共同研究をやめるケースも増えていると思う。(国研等の自然科学研究者,准教授、主任研究員クラス,男性)

- 101 アウトリーチに関する取り組みは年々進んでいると感じる一方で、やる気のある研究者の自発的な取り組みや研究所が少ない予算を削って実施するなど、負担にもなっているようにも感じる。国が科学者の社会とのつながりを求めるのであればアウトリーチのための予算やリソースについては研究費とは別に配分すべきではないか。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 102 一部の研究者は、国内と国外の研究職を兼務しているが、これは国際的な利益相反・債務相反として問題視すべきではないか？ 実際の研究情報のやり取りや研究費の使われ方に問題がないか精査すべきだと思われる。一部の競争的資金で国際的共同研究に研究費が出ているが、先方国とのマッチングなどではない場合、研究費の配分が不均等になり、うまくいかない事例が多いので、やるべきむしろ、研究配分機関は、海外のファンディングを日本国内の研究の推進にうまく使えるよう、制度や運用方法を整備すべき。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 103 国際共同研究が前提の資金なのに英文の契約書ひな型が用意されていないAMED事業などがあり、応募・採択されて後悔している。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 104 優秀な外国人の研究者の雇用は必要であるが、所内文書の英語化をすすめないと日本語がかなりできる外国人でなければ研究所の業務の中核に参画できない。日本語・英語両方の文書を作成する等作業量の増加に対応できる人員数の確保は難しい。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 105 国際研究に関する利益相反に関してはよく国際研究を実施している研究者は意識しているように思えるが、普段あまり国際研究と携わっていない者にはその意識が弱いと感じる。継続的な国際共同研究を実施することが重要になるが、国際共同研究の場合現地の研究者が非常に大きな労力を割いて研究を実施しているため、現地の研究者の負担増につながっていることも考慮する必要がある。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 106 海外特許を出願する必要経費が工面できなくて、せっかく持っている技術を国内特許しかおさえなかった結果、海外の企業に技術をとられた、という残念なケースが実際にあるので、海外特許請求費用を申請できる研究費の枠組みができるとよいと思います。私たちの属する研究機関や学会では、国民の理解を促進するためのアウトリーチ活動にも力をいれており、YoutubeやSNSで、肩の力を抜いて研究成果や社会還元について学べるコンテンツを配信しており、視聴数も上がっているので効果はあるのではないかと考えています。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 107 今回の一連の質問のように、国際連携をしると言いつつ、利益相反や責務相反に十分な意識(責任感)を持ってというメッセージはダブル・バインドであり、「国籍による差別をしない」というコンプライアンスも考えると、何もしないことが最もリスクが高い。中国の研究レベルは高いため、欧米と中国を同等に考えて別け隔てなく気が合えば共同研究をできることが理想であるが、中国に対しては情報漏えいに気をつけたいといけななどといって勝手に問題視されてしまうと、目の前にいる中国人留学生に対してどう対応しないといけないのかなど、現場としてどうすればいいかわからなくなる。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 108 近年は文部科学省などから国際共同研究を推進する研究費について公募されるなど、国際的な連携に対する意識の変化が見られる。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 109 イノベーションについて、学会等による地方公共団体との共創に向けた取り組みが継続的になされ、社会的課題に取り組む研究が増加しつつある。国際化について、例えば海外研究者への研究資金の授受について、日本の制度上でのより柔軟な対応が望まれる。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 110 研究に取り組むにあたり、自らの研究の社会的な意義・価値とその社会的意義との関連は、常に思考の片隅に意識して考慮すべきことだと思います。一方で、全ての研究成果がそのまま直接的にそれらに結びつく必要は無いとも考えます。現時点で社会に貢献している科学研究の多くが一朝一夕の成果ではなく、多くの基礎研究の地盤のうえに時間をかけて積み上げられた知識の集積と応用の結果であるからです。国際連携については、組織の内部独自ルールなどによる柔軟性と機敏性の不足が、資金の利用のほか人的交流や研究ネットワークの構築活用の上で障害になった事例も多く経験しています。諸事において「失敗(不祥事)を作らないために全て事細かくルールで縛り付ける」という傾向は日本の研究資金では諸外国よりも強いと感じます。研究資金については、使用にあたって所属機関等が内規として(本来なかった筈の)規則や基準を細かく設定して運用させる事例も多く、これが国際的な視点で見て「自由度の少ない研究気風」として魅力的ではないとの評価につながっていると認識しています。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 111 国際研究における利益相反・責務相反については私自身よくわかっておらず、周囲の研究者を見ても良く意識されている状況にはないように思います。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 112 国際共同研究を推進するにあたり、日本の制度(研究資金の利用ルール)は、国際的な慣行に照らして十分に適切でない面が多いです。女性活躍という閣議決定事項があり、科学技術分野でのその推進は大事とされるのにもかかわらず、実際にそれに対応した制度設計や相談制度がお金を配分する側の文科省やJSPSに対応できていないことも問題とします。夫妻で科研費(国際共同研究強化A)を別々に獲得して長期留学するときなどの旅費法の問題(事実上2人のうち1人が支給旅費を半額にしないといけな)のこと。半額にしなくても良いという規定もあるが、総務などの判断は安い方の半額にと言われ、事実上半額になるとのこと。個人に支給される研究費であるのに、旅費の支給に関して家族形態が問題になるのは、研究者の研究活動設計が崩れてしまい、大変に困った方がいます。が相談しても結果的に放置されている事案、問題が上がった時の支援がきちんとできていないことが文部科学省やJSPS案件では、女性活躍関係の事案で聞きます。海外の大学の事例では、家族形態がどうであれ、科研費などの研究費の使い方に制限が出る例はないとのこと、その夫妻の事例は渡航先の国において、事情を知った現地の学会長クラスの大学研究者がその国の女性研究者団体やアカデミーに事情を説明したそうです。大型科研費の学術変革領域の班長も、若手を活躍するように謳っているのにも関わらず、育休などで離脱した場合の処置が規定にないそうです。そのため、私の周りでも班長になるのを躊躇う女性研究者も多くいます。国際的に見ても日本のアカデミアの信用にも関わるので、文科省やJSPSは女性研究者の活躍の問題について何かしらの改善をした方がよいと思います。(国研等の自然科学研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 113 問5-01に関して、我々研究者は、イノベーションを創出するために研究に取り組んでいるわけではありません。イノベーションを創出しているかを見せかける活動に競争資金がつきやすい現状には、かなり強い違和感があります。SIPでイノベーションを創出できたら大間違いです。既に助走がついている研究開発を寄せ集めて、社会実装を実現するのはただの「アレンジメント」です。政府が「我が国の科学技術を振興し、(将来の)イノベーションを創出したい」と真に願うのなら、何の役に立つかわからない基礎研究にも惜しみなく予算を配分すべきです。研究費のみならず、基礎研究を担う人材確保のための予算配分が喫緊の課題と考えます。現場ではここ数年、ポストが減るばかりで研究者1人あたりの雑用の負担が激増し、研究どころではありません。「科学知は人類共有の財産である」「学術研究への投資は人類の未来への投資である」という理解を国民に広め、基礎研究とそれを担う研究人材の重要性が我が国の国民にあまねく理解されるような教育が、今こそ必要なのではないでしょうか。(国研等の自然科学研究者、助教、研究員クラス、男性)

- 114 学会にて国民の理解を促進するためにどのような取り組みを行うべきかに関する議論は頻繁に行われているが、仲間内での議論にとどまっておき実際のアクションはないように思える。(国研等の自然科学研究者,助教、研究員クラス,男性)
- 115 研究成果を社会実装するかという点については当研究所では目的の一つとなっているため関係は非常に高いと思います。学会で目指している研究内容と研究所で目指している研究内容が一致しないこともあるため、バランスの取れた研究者の判断が求められます。(国研等の自然科学研究者,助教、研究員クラス,男性)
- 116 総合知に関して、私からみるとまだまだな点が見受けられるが、日本としてはポテンシャルを十分持っており、後は人材を適材適所に割り振ればうまく回ると想像する。(国研等の自然科学研究者,助教、研究員クラス,男性)
- 117 社会的課題に研究者が合わせるのには無理。多種多様な研究の中からイノベーションに繋がらそうなものに対して、インセンティブを与えるべきで、実績のある研究、研究者に予算を配分するべきである。(国研等の自然科学研究者,助教、研究員クラス,女性)
- 118 国際連携に関して、リスクに対して十分意識して組織的に取り組んでいるが、リスクを気にしすぎてスピードを失い、結果国際連携のチャンスを失っている場面も見られる。研究者個人でリスクを背負う代わりに組織的なバックアップサポートがあるのはありがたいことだが、もう少し柔軟に、スピード感を持った対応ができるようになるとよりよいように感じる。(国研等の自然科学研究者,助教、研究員クラス,女性)
- 119 日本発の論文の引用数が少ないのは、国際的な認知が低いことが原因だと思います。この点で、スーパーグローバル大学のように「海外の留学生を大量に受け入れる」といった戦略は適切でないと思います。優秀なアジアの留学生の多くは欧米に留学する傾向があります。実体験としても、留学生が心身のバランスを崩すことが多くあり、その場合、保護者との連絡等で大変苦労いたしました。引用数を挙げるためにはもちろん優れた研究成果を挙げるのが大事ですが、日本発の「優れた研究成果」を発信する機会を支援することが大事だと思います。国際共同研究に関する研究費が新設されるということですが、共同研究を行う必要性が無く研究費獲得のために無理やり共同研究を行っても意味はないと思います。Gordon conferenceのような質の高い学会での学会発表や、質の高いOpen access雑誌への掲載料の支援などが、日本のプレゼンスを高めるうえで大事だと思います。(重点プログラム研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 120 経常経費の圧迫により外部資金の獲得に多大な労力を割く必要があり、結果的に社会活動や国際社会での積極的な活動を実施することが困難となっている。(重点プログラム研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 121 国際共同研究や国際連携は個人レベルと大学レベルがある。例えば、海外の大学と協定を結んだとしても、それは個人レベルに過ぎない。〇〇校と国際連携協定を結んで、とよくその数を耳にするが、実態はその数の先生が個人的に繋がっている程度のもの。大学どうしの本当の意味での連携など、どこも行っていない。学問は個人レベルのものであるため、それはそれでよいと思う。科学技術と国民との繋がりについて、これについては全くできていない。僕は大学院の学生に、中学校や高校に行って生徒達に君の研究の価値を説明できるか、とよく言います。国民はマスコミの誤った情報に踊らされている。その誤解、偏った情報を翻すのは相当なエネルギーがいる、誰々がノーベル賞をとった、といったような打ち上げ花火的なものがあれば、それはそれで多いに宣伝すればよいと思うが、まあ1週間もつかもたないか、もっと根底から地域社会と繋がる草の根の宣伝活動が必要に思う。例えば、日本の年間総発電量は自然再生エネルギーでは到底賄えない。無理。しかし、そう信じている政治家、マスコミ、国民は沢山いる。しっかりとした事実をデータをもって説明する、その勇気と説明機会、発信方法を今後考えて行く必要がある。ターゲットは小学生、中学生、高校生でしょう。博士課程の学生は、中学高校に行って自分の研究を講演することを義務化(必須単位化)すればよいと思う。(重点プログラム研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 122 分野によって大きく異なるが、大学における「雑務」を減らす方向にすべき。(重点プログラム研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 123 国際連携では日本の国際競争力、日本の強みなどを考慮する必要があり、難しい側面がある。しかしながら、いわゆる非競争領域や学術性の高い研究についてはもっと積極的に共同研究や人材交流があってもよいと思う。海外に比べると国際連携はかなり見劣り、消極的だと感じる。(重点プログラム研究者,教授、部局長等クラス,男性)
- 124 我々の分野は合成生物学と呼ばれ、ゲノム編集等で改変した微生物を人間社会にどう生かすかを考える学問である。気候変動や感染症に対する意識も高く、AIや地方創生とも相性がいい。またこの分野ではベンチャー企業が生まれやすく、世界からの投資も右肩上がりである。一方で日本では成功事例が少なく、成功例と言えそうなのは〇〇発の〇〇〇〇〇〇【企業名】くらいではないか、このような事例をもっと創出すべきであるし、我々〇〇大学も〇〇〇〇〇〇【企業名】以外の事例を出さなくてはならない。この点を大きな課題として認識している。(重点プログラム研究者,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 125 前にも記載したが、基本的には論文が絶対的な評価指標となっているために、生き残りをかけて論文執筆に集中せざるを得ない状況である。特にアーリーキャリアの研究者は、心身共に余裕がなく、社会貢献や社会実装どころではないだろう。教育すら「雑用」と表現することもしばしばある。共創活動は、合意形成やネットワーク作りなど、非常に時間がかかる(時間的な投資が必要な)ものであり、すぐに論文にもなりにくい。したがって、進んでやりたがる教員は、よっぽどおめでたい楽道家か、テニユア教員くらいに思える。ともかくにも、政府がやらせたいことと、研究者の評価指標に乖離がすぎる。これではお互いに不幸になるので、大学内の人事システムを根本から変える必要がある。そして、大学は自ら変わる可能性が極めて低いだろう。自分自身も、何年もこのことを上層部に訴えてきたが、まったく変わらなかった。このような様子を見て絶望し、多くの若手中堅研究者が去っている。そして、これを見て、学生も博士課程に來たり、研究者になろうという気持ちにならない。典型的な悪循環に陥っているといえる。(重点プログラム研究者,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 126 国際共同研究を推進する研究助成が多い一方で、相手グループに配分される研究費が国際的視点で見ると明らかに少ない。そのため、参加するメリットを見いだせず、世界的な研究グループが参加することはほとんどないと感じる。(重点プログラム研究者,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 127 私が所属する部局では20年以上に渡り同様の研究を継続している研究者も少なくない。社会的課題は昔と今では大きく変わっているため、未来社会を意識した研究テーマに切り替える必要があると思われる。私は大学研究はシーズの創出にあると考えているので、すぐには芽が出ない研究にもある程度投資していく必要性はあると思っている。(重点プログラム研究者,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 128 学会は研究成果を分かりやすく社会に示し、社会に還元するとともに国民の理解を得る努力を積極的に行う必要がある。研究者は、自身の役割と研究の社会的な意味を常に再確認しながら、幅広い視点を持つ必要がある。異なる研究分野との交流を行い、新たなイノベーションを創出する必要がある。(重点プログラム研究者,准教授、主任研究員クラス,男性)

- 国際共同研究を行う上で、アカデミア研究者同士の共同研究はこれまでと同様に推進できるものと思っておりますが、大学院生やポストドクの日本での受け入れについてはまだまだ公的資金等の措置が必要と思っております。欧米での大学院生やポストドクの雇用には、各国の省庁や企業による資金提供を元に(自身の留学先である英国ケンブリッジ大でもそうでした。)、受け入れ教員との雇用契約が行われていますので、それに相当する(JSPS海外特別研究員のような)プロジェクトの拡充が海外研究者の受け入れ拡大につながるのではと考えています。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 異分野融合研究は、20-30代では当たり前のようになってきた。狭い研究分野に留まっている60代とのギャップが鮮明である。一方で、海外留学経験のある若手や、海外の同世代とのパイプを構築している若手は減っているのではないかと。情報収集する若手ほど、自国の凋落に敏感であるため、自己防衛的な思考にならざるを得ず、国際的活動に対する冒険心は薄れている。海外のトップ人材はそもそも日本に研究しに来ない(待遇が悪すぎるため)。若手が安心して家庭を築きながらイノベーション創出に向けた研究に専念できるように環境整備が進むことを祈っています。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 研究者が自身の研究と社会との接点(社会的意義)を考える必要があるのかどうかはわからない。それを考えることで成果につながる可能性もあろうが、ある程度はそれを考えないことを許容しても良いように思える。研究者と科学コミュニケーションを行うものは役割が異なるのではないかと。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 国際化を含む利益相反に関しては、かなり複雑なこともあり、具体的ケースを提示したり、相談できる窓口などを設置して欲しい。積極的に行いたくても、不安な点があるとなかなか国際共同研究等を進めることが難しい。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 研究者それぞれや、アカデミア自体は、十分に高い意識を持っていると感じるが、大学の運営などマネジメントが十分に公平であるとは思えない。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 国際的にすべき研究と、そうで無い研究があると思う。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 本パートに関連し、ただでさえ研究時間の確保ができない研究者に、これ以上仕事を増やさないで欲しいと切に願います。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 研究インテグリティ(特に、国際連携に関連した項目)に関する理解はほとんど進んでいないように感じます。社会情勢が大きく変化している時期ですので、しっかりとの方針を策定し、あらゆる手段で周知する必要があると思います。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 研究者が利益相反・責務相反を正しく理解し、公共の利益や学術の発展のためにそれら乗り越えていくためのサポート体制が十分ではない。大学の利益相反マネジメント(委員会)も、研究者に「月下に冠を正さず」を徹底させることを役割としており、どうすれば利益相反を解決して研究者個人の研究活動を支援するか、あるいは大学発ベンチャーを育成できるか、といった発想で動いていない。利益相反に関する十分な知識や経験を身に付けた者を担当者に置くなどの工夫が必要である。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 研究データが企業の思惑によって取られるものがあるということについて、感わされないか不安に感じることもある。国際化、分野融合そのものは自然と進むものなので、それほど心配していない。一般への普及の取り組みも以前よりは改善しており、深刻には感じていない。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 有機的な国際連携ができない理由は、研究制度上の問題もあると思うが、根本的な問題は、日本の大学特有の長時間労働や事務・雑務の多さにある。その問題によって、欧米社会の特に若手女性研究者は、日本での研究活動をそもそも考えていない人材が多い。日本での研究活動に対するネガティブなイメージが根付いている。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- ・研究活動のアウトリーチについて重要性は認識されていると思われるが、それを実行する余裕のある研究者は少ない。また、市民に向けた分かりやすい説明を実施する適性のある研究者はさらに少ないように感じる。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 日本と外国で2カ所でラボを持つ人が、ほぼ同じ研究プロジェクトを双方の国のグラントに提出して、双方から多額の研究費を獲得するケースを知っていますが、問6-08 問6-09に抵触するのではと思います。ダブル所属の研究者のグラント審査の際に、研究内容やエフォートチェックを厳格にしてほしいです。(重点プログラム研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 研究インテグリティの部分については、このアンケートに回答する機会をいただくまで、しっかり考えたことがなかった。あまり浸透していないことかもしれません。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 社会的課題に基づいた研究を重視するあまり、研究の方向性が限定されすぎている。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 日本の研究力の向上、低下の抑制を行うためには、国は研究者の時間を奪うことにつながるような余計な口出しをしないことが一番です。研究費の獲得やポスト獲得のために、研究者はイノベーション創出のための十分な競争にさらされています。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 「総合知」の活用について：人文・社会科学と自然科学の協働は、私の分野(工学)の周辺ではほとんどなされていない。興味はあるが、出会いがないという現状がある。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 私自身、専門とする心理学のみならず、生理学や社会学、データサイエンスとの総合的研究を行ってきました。その結果として、「この人は何でもできる人」というレッテルを貼られ、「別にウチの学部で雇う必要はない(=専門性がない)」として、教員選考において何度も不利を経験してきました。総合知を推し進めるのはたいへんよいことですが、その人材を受け入れる機関も同時に構築しなければ、永続的な人材流出、人材損失へとつながると思います。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 利益相反・責務相反のリスクについて「近く」の研究者はこの点をよく考えていると思いますが、〇〇〇大学全体となると分かりかねます。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)

- 148 所属の〇〇〇【公的研究機関名】では「研究インテグリティ」について非常に高い意識と組織的な対応をしているが、大学との共同研究においては工学部の研究者でさえあまり理解・重視しておらず不安などがある。また所属する心理学研究や認知神経科学においてはほぼそうした教育は受けてこなかったため、〇〇〇【公的研究機関名】に入るまで自身も知らなかった。(重点プログラム研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 149 わたしの研究分野においては、とくに少数者(マイノリティ)の認知や地位向上といった社会的課題を解決するうえで成果を上げてきていると思います。しかし、それは、文化に関わる社会的課題の一部にすぎません。価値創出という問題全般に関して、わたしの研究分野は多くの知見を提供しようと思っております(たとえばSDGsをふまえた民間・政府系機関の社会的活動の評価など)、人的資源の多くはより基礎的な研究にふり向けられており、研究の広がりが限定されたままです。これに関しては、なにを解決の糸口にすればよいか、目下わたし自身が考察中です。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、男性)
- 150 研究活動の国際化は進んでいるが、それに伴って生じる、利益相反・責務相反のリスクはほとんど意識していない。回答を行っていて意識を高めるための啓発活動が必要であると気づいた。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、女性)
- 151 国際連携に関し、研究資金の利用ルールは修正すべきだと思う。具体的には報告書の作成である。海外の研究者とともに日本の研究資金を獲得した際、海外の研究者は後で長々と報告書を書く必要があることに驚いていた。研究成果の評価は業績に基づけばいいと考えている。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、女性)
- 152 日本における自分の専門領域内ではあるが、多少なりとも社会的に有意義な活動を行ったとしても、それが評価されるとは全く感じられない(むしろ、何でそんな業績にもならないことをやるのかとバカにされそうな気もする)。また、異なる分野との共同研究を行ったとしても、それほど評価されないだろうとも感じている。正直、社会的に意義があると感じて研究を始めたとしても注目されず、時代が後から追いついてくることも多々ある。例えば、経済安全保障の研究を長年行っている先生は、20数年前に研究を始めた時はほぼ注目されていなかったが、現在は社会の中で重要な課題になっており、様々な場所で活躍されている。また、10数年前から、「感染症は安全保障として考えられなければならない」と言っていた友人も、現在の状況では注目されているが、研究を始めた当初はそうでもなかったのが実態である。「今の社会」にすぐに役立つといった考え方ではなく、「将来の社会の中で、いずれかが役立てば良い」といった長期的な視点で、研究を捉える必要があるのではないだろうか。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、女性)
- 153 問6-07についてですが、日本の研究資金利用ルールは、海外研究者の招聘に関して非常に不便だと思います。海外では招聘がもっと簡単にできる仕組みになっているようです。(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 154 現在気候変動やCOVID-19の感染爆発など、世界は数多のグローバルな規模のリスクにさらされている。科学・技術の発達は、そのような問題の解決手段となり、新たな社会的・経済的利益をもたらす可能性がある一方で、人間社会が築き上げてきた価値観や人間の安全を直接的に脅かすリスクにもなりうる。特に先端科学・技術は現時点で予測不可能なことも多く、それを利用し管理するガバナンスによる方向づけが将来の人間社会に大きな影響を与えうる。それ故、今後先端科学・技術の研究・開発の促進はもちろんであるが、それに対する人文・社会科学の議論がより一層重要となると考える。(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 155 日本の場合、経費の支払いは原則、伝票ベースで行われるが、海外(特に途上国など)の場合、現金対応が必要な場合が多い。研究者がある程度、現地で現金を使えるような、柔軟な制度が望まれる。(人文・社会科学系研究者、助教、研究員クラス、男性)
- 156 わたくしの研究分野では日本の全般的な状況を踏まえ、社会への還元を目指して研究課題を設定しているつもりですが、必ずしもそのまま社会に貢献できる水準には至りません。この点は非常にもどかしく思います。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、男性)
- 157 e-learningなど取り組みはしているが、それがどこまで活かされているかは疑問。(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、)
- 158 文理融合型の研究自体は増えているが、研究目的の共有などがうまくいかないために、研究成果に繋がっていないように思う。特に若手は研究職を探すことに追われているため、長期的なスパンで自身の研究プログラムを考える余裕がない。(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、男性)
- 159 「総合知」というのは、それを生み出さねばならないとしてどこから押しつけられるものではなくて、自律的に発生するものではないのか？(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 160 ・教員の在外研究や外国からの訪問教授の受け入れなどは、比較的、実施されている方だと思います。(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 161 アメリカでは、研究資金を獲得した場合その一部は自身の給料(summer salary)に反映できる。このようなシステムを導入すれば、皆の研究のモチベーションも上がるのではないかと。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、男性)
- 162 国際共同研究・成果発信に積極的に取り組んでいる大学と、ほとんどできていない大学との間に格差がある。(人文・社会科学系研究者、教授、部局長等クラス、女性)
- 163 日本の研究における最大の問題は学会制だと考えている。ほとんどの学会ではヒエラルキーが存在し、重鎮が絶対的なパワーを持つ。学会があるために、研究専門分野の学閥、縦割り、仲間意識が蔓延している現状があり、自由な発想や交流、魅力的な研究が阻まれてきた問題の根深さがある。国際連携に関しては、英語力、研究力があり、インパクトファクターが高いジャーナルなどに定期的に論文を出していないと不可能であると考えている。(人文・社会科学系研究者、准教授、主任研究員クラス、女性)
- 164 省庁など国の人材のリカレント教育などを行うことにより政府を担う人材を継続的に供給すると良いと思う。(大学マネジメント層、学長等クラス、男性)
- 165 「総合知」やオープンイノベーションを促進する補助金や制度は増えており、それ自体は悪いことではないが、大学の側に内発的な本気度が欠けているように見受けられる。国際連携が日本の大学の最大の弱みである。言葉や文化の壁、ガラパゴス的な制度やルールなど、課題は山積している。(大学マネジメント層、学長等クラス、男性)

- 166 日本の大企業が内得している資金をスタートアップに投資したり、アカデミアとの共創に投資することを期待する。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 社会との関係、オープンイノベーション、国際連携に関しては、博士人材の活用を進めることが肝要と考える。これまで、中央行政、地方行政、サービス産業界は、意図的に博士人材の活用が遅れていたが、デジタル化、国際標準化を進める上では博士人材をどう使いこなすかが鍵となる。また、科学技術やイノベーションは、短期的に社会還元できる出口に近いものを生み出す研究だけではないことを
- 167 周知することも重要。本学も、〇〇〇オープンイノベーションエコシステムという長期戦略を推進しており、一方、政府も、科学技術競争力強化に向け、10兆円ファンドを創設し、社会ニーズを理解した博士後期課程学生育成を目指すSPRING、オープンイノベーションエコシステムの強化等に着手されており、これらの推進を持続的にいき、私立も含め世界と伍する研究大学を日本から輩出していけることを期待したい。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 168 特にベンチャー支援が環境面、財政面とも薄い。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 169 日本ではオープンイノベーションが非常に遅れていると思います。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 170 大学と各省庁や企業が共同で地域的な実証の場を拠点化してはどうか。(分野にもよるが、たとえば防災・減災)(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 171 国際共同研究の推進・実施に伴う研究のインテグリティの確保は重要な課題であり、本学でもそれに対応すべく、組織や制度の見直しを行っている。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 172 「総合知」については、科学技術基本計画等で新たにこの概念が位置付けられたことから、一定程度認知度も上がってきたように感じられるが、今後「総合知」に関しての成果が生み出されていくことが必要だと思う。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 173 オープンイノベーションとクローズドイノベーションの区別、ベストミックスを実行できるような周知が大切。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 174 研究成果をイノベーションに繋ぐ事は重要と考えますが、最近はこの点ばかりが重要視され、基礎研究が軽んじられているように感じます。両方が必要だと認識すべきです。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 175 異分野の協働・連携の設問で、研究課題の設定と研究開発の実施とは表裏一体のものであり、2つの設問に分けるほどでもない気がする。国際連携は新型コロナのために足踏みしている影響が今は大きく、正当な評価が難しい。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 176 米中問題等、政治問題と絡んでくる話が重きをなしており、国際的な取り組みに多大な影響を及ぼしている。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 177 科学技術に基づく合意形成をする社会になることが必要である。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 178 海外との共同研究で常に問題になるのは、会計年度の相違、海外研究機関への予算配分などである。また、昨今安全保障の関係が国際共同研究で問題になる場合があり、国としての統一的な対応を要望する。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 179 日本では自然科学系と人文・社会科学系との連携どころか、自然科学系の中ですら学部間の壁があり、共同研究が進まないと感じている。実は学内の学部間の壁を壊すことすら十分できておらず、どうやって広い議論ができる大学に改革するか苦悩している。私はこのアンケートに答えながら教育・研究担当理事としての自身の仕事の至らなさをつくづく痛感した。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 180 ・企業が実施しにくい基礎研究を推進するために、学内に企業との共同研究講座(企業人材を教員として位置づける)を開設して、企業目線の基礎研究を進め、併せて活きた学生教育に資するなど、積極的な産学共同研究の取り組みが求められる。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 181 スタートアップ支援制度についてはギャップファンドや大学ベンチャーキャピタルなどを有するか、大学間格差が極めて大きい。一方で、大学発スタートアップに基盤となる良好な技術やビジネスアイデアは地方大学でも十分に生じるので、複数大学・地方自治体・産業経済団体による地域スタートアップエコシステム形成を推進し、大学間格差を補正する国の施策は非常に重要であると考えられる。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 182 問6-01,02について、取り組んでいるが、受け手とのマッチングがうまくいっていない。問6-07,08について、そのような場が存在するのか疑問である。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 183 安全保障輸出管理など社会における組織としての大学の責任を認識し、現状に即した対応を行うことが出来る組織を構築しています。医学研究に関しては医療倫理審査などにおいて医学を専門領域としない方の御意見を頂くなど、独善的な活動に陥らないよう総合知を活用することを心掛けています。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 184 科学技術における国際連携・研究交流の際には安全保障上の管理義務が機関内に発生するため、業務負荷が上がるため、政府主導の解りやすい一元的な管理をして頂きたい。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 男性)
- 185 大学がイノベーションのために他のセクターと共同することはまだ不十分だと思われるが、たとえば都道府県や市町村などの行政が大学と連携する仕組みを持っていないなど、社会全体として横のつながりや流動性が低すぎる。(大学マネジメント層, 学長等クラス, 女性)
- 186 大学において学際的な研究を推奨する機運が高まりつつあり、今後、社会的課題の解決に資する異分野協働の研究が増えると考えられる。(大学マネジメント層, 教授、部局長等クラス, 男性)
- 187 問6-12,13に関しては本学では問題意識は十分あるが、現状ではしっかりした制度までは整備されていないため、喫緊の課題だと認識しています。(大学マネジメント層, 教授、部局長等クラス, 男性)

- 188 研究成果が盗み出されないような安全措置が極めて貧弱である。(大学マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 189 日本全体として外国へ留学する研究者が減っているなど,国際連携は手薄になっているのではないのでしょうか.新型コロナウイルスのパンデミックでさらに悪化しているように思います.何とか回復・発展につなげてほしいです。(大学マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 190 まだまだ利益相反マネジメントは取締法的なイメージが強く,各大学におけるベンチャー創出の足枷になるケースもあるかも知れない.とりわけ事務組織がしっかりケーススタディも含めて,理解することが重要である。(大学マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 191 学会等の研究コミュニティと社会との関係については,学問分野や学会によって,社会貢献度に大きな差があるように感じます.国際的に競争力が高く,学術分野の発展,研究成果の社会還元インパクトを与えている組織がある一方,単に研究者の集まりにとどまっている組織があるように思います。(大学マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 192 問6の1と2について,もともと学会の活動が,「科学技術・イノベーションについての国民的理解を促進する活動」や「地方公共団体,NPO/NGO,市民等の多様な主体と共創し研究活動を行うこと」を目的とするのかを理解していないので回答できない.本学は農学,生命科学の総合大学であることから,扱う研究分野では頻繁に自然科学と社会科学で協働する取組みが行われている.研究インテグリティについて,国内における研究コンプライアンスへの対応はほぼ十分であるが,国際化への対応は今後の課題である。(大学マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 193 経済安全保障の文脈からの「研究インテグリティ」については,大学だけでなく,機微技術分野に関連する学会も含めて取り組んでいただく必要がある.また,大学において研究活動の国際化に係る利益相反管理を徹底させるのであれば,例えば米国高等教育法第117条に倣って,公的研究費を受給する際には外国からの資金提供等に関する届出を法令等に基づく義務としてはどうか.個別の大学が行う自主管理では,教員との労働契約の範囲にとどまらざるを得ず,対応の徹底には限界がある。(大学マネジメント層,教授、部局長等クラス,女性)
- 194 異分野融合等は現在まだ不十分であると認識するが,その必要性の認識と実際の計画・実施は急速に拡大しつつあると感じている。(国研等マネジメント層,学長等クラス,男性)
- 195 イノベーションを進めるための基盤的な研究が重要である。(国研等マネジメント層,学長等クラス,男性)
- 196 イノベーションは必ずしも経済的な利益の大きいものばかりではないはずだが,全体として経済的利益を産みやすいものに多くが配分されており,社会の持続性やウェルビーイングなどへの研究費配分は非常に少ない。(国研等マネジメント層,学長等クラス,男性)
- 197 われわれ基礎研究者は新たな『知』を作るためのプロであり,『知』を社会的な『価値』へと転換していくプロが日本が弱いのが問題.また,そのような人材を育成しているかという点,現在の日本の仕組みの中では弱いと言わざるを得ない.『知』を作るプロに社会実装を期待することにも無理がある(新たな『知』を作るためには100%のエネルギーを『知』を作るために使わないと世界に勝てないから).コーディネーターの育成が急務.そこで,われわれはResearch Management and Coordination (RMC)という研究者の新たなキャリアパスを作った次第。(国研等マネジメント層,学長等クラス,男性)
- 198 産学連携推進支援や制度についてはかなり整備されてきたが,多くの研究者がその制度活用についての実践知識・手法のキャッチアップに追いついていないのが現状ではないのか.現在の社会課題に向けた研究課題設定がクローズアップされているが,すぐに役立つ研究でなく学術的価値からの研究基盤を厚くすることが,長期的視野に立った場合には多様な社会変化に対応できるのではないのか? 若手研究者が海外での経験を積むことは重要と考える.一方で,国際共同研究の数は指標とすることは適切なのか? 国際的に共同研究を依頼される国内研究の充実が重要ではないのか?(国研等マネジメント層,学長等クラス,男性)
- 199 純粋な学術的研究を行う研究者には,自分の研究がもたらす産学連携的な潜在価値の認識が薄い場合があり,研究者へのきめ細かい意識づけ等により,まだまだ改善の余地がある.また,大学共同利用機関や大学と研究開発法人の(見えない)垣根を除く政策的対応があると,基礎研究(おおまかに言って大学共同利用機関や大学が担う)と応用研究(大まかに言って研究開発法人が得意とする)をより有機的に紐付けることができるのではないのか.現状はほぼ連携がなく,国際競争力の観点からも,もったいないのではないのか.(国研等マネジメント層,学長等クラス,男性)
- 200 人文・社会科学と自然科学の協働も含んだ異分野が協働する取組は,今後ますます重要になると考えている.多くのコミュニティを巻き込んで議論できる場の構築が必要である。(国研等マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 201 リテラシーに関して国としてアウトプットの取組みは充実してきた.ターゲットを全国民とするか,意識がある方とするか,そのあたりの切り分けが明確であれば資源の集中的な投入も可能だろう.うらがえせば,薄く広く行われている現状がある.文理融合はまだ始まったところという感じ.お互い他にもやるのがたくさんある中で,成功例が増えてくればフォロワーも増えよう.国際化とインテグリティのバランスは薄氷を踏むような毎日です。(国研等マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 202 私が研究者になった過去30年弱の間に質問にあったようなことへの取組が活発化している.それによる成果が期待通りに上がっているのかは分かりません。(国研等マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 203 特許の制度や税金の仕組みなど,日本は国際的な学術連携,とくに産学連携がしにくい.政府がもっと制度を改革し,国際連携によって利益が上がる仕組みに変える必要がある.また,大学が投資や寄付を受けた際に税額控除を受けられるように税制を改正すべきである。(国研等マネジメント層,教授、部局長等クラス,男性)
- 204 自然科学と人文・社会系との連携については,近年になって少しずつ進められているが,まだほんのわずかにすぎない.今後もっと推進する環境整備が必要と思われる.国際化に伴う利益相反・責務相反のリスクは,まだ十分に周知されているとは言えず,今後のさらなる国際化を考えれば,やや強い態度をもって周知する必要があると思われる。(国研等マネジメント層,准教授、主任研究員クラス,男性)
- 205 本パートの内容は,各研究分野によって,それが求められている研究分野と必ずしもそうではない研究分野とがあると思うので,非常に回答が難しかったです.また,5-12(614)および5-13(615)は,研究の対象が言語や言語資源およびそれに関する情報学であるという性質上,外国との共同研究を推進しているが,外国機関から施設・設備の受け入れをおこなった実績はなく,また,外国機関の身分を持つことによるリスクも想定しづらい。(国研等マネジメント層,助教、研究員クラス,男性)

- 206 カーボンニュートラルの実現にむけた研究は、国を挙げて産官学の連携で取り組むべき課題。そうなる組織的な取り組みを期待します。(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 207 企業での研究開発においても日本での新製品上市は規制の壁が高いと感じる場合があります。まずは海外市場での上市から目指すことがある。大学でのイノベーションならなおさら、保守的な土壌よりも、より新技術への許容範囲のある海外に目を向けざるを得ないのかと思う。(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 208 様々な規制や過度の成果主義が自由なイノベーション活動の妨げになっていると考えます(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 209 日本化学会,化学工学会,高分子学会などの学会誌では,科学技術・イノベーションと社会についての掲載記事をここ数年よく見かけようになりました。十分とは言えないまでも,そこそこ各学会で社会との関係が意識されていると感じます。学会誌なので社会一般の方が接する機会が少ないのが残念です。(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 210 自らも所属する学会においても,社会との繋がりを意識した活動を行っており研究の価値を広めるよう取り組んでいますが,充分とは言えないと感じています。特に最近では社会の求めるニーズも多様化しており,環境も大きく変化していますが,それに追従するためには,異業種との更なる連携も強化すべきと感じています。(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 211 科学技術・イノベーションに対し,一定のアピールは認めるが,国民の理解が十分に得られているようには思えない。学術会議と政府が協調して,その必要性を訴求して頂きたい。(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 212 わが国では利益相反・責務相反に関するリスクに対する意識がまだまだ低いと考える(大企業の代表等,学長等クラス,男性)
- 213 イノベーションという用語が分かり難いので,わかりやすく定義してうまく表現できる日本語を作るといいと思います。イノベーションとカタカナで書くと,最先端,キラキラ,ヒーローイノベーター,従来構造をぶち壊す破壊的なもの・・・攻撃的な印象を受けます。日本人の感性では,地道な変革の輪でみんなが良くなるもの,という印象を与える用語で表現する方がいろんな人が参加できそうに思います。その輪の中で知らないうちに発生していたものが後から振り返ると凄いイノベーションだった,という方がうまくいきそうな気がします。(大企業の代表等,教授,部局長等クラス,男性)
- 214 私が関係する学会では,他国の研究者や市民との対話などが積極的に行われていると思う。政府支援の補助金や委託研究においては,もともと税金が故に致し方ない面もあると思うが,海外技術が活用しづらい,委託研究後の研究資産は廃却が基本など,改善すべき点が多々あると感じる。(大企業の代表等,教授,部局長等クラス,男性)
- 215 国際的な多様性の確保,国外への技術流出懸念,国力低下等のグローバル vs リスク という相反するバランスをどうとるのが重要と思います。(大企業の代表等,教授,部局長等クラス,男性)
- 216 最先端技術を実証実験できる場が,例えば研究施設を中心に,地方,遠方エリアまで,蜘蛛の巣状に広がり,日本全国あらゆる地域で連携され,あらゆる方々が実感できれば更なるイノベーションに繋がると感じます。(大企業の代表等,教授,部局長等クラス,男性)
- 217 最先端技術の実証実験を行うことのできる場(特区のようなもの,規制が緩和された地域)を国内にもっと設けるべきかと思います。(大企業の代表等,教授,部局長等クラス,男性)
- 218 問5-10:オープンイノベーション拠点の整備に向けた産学官の取組みは多方面で見られるが,補助金やポジションの獲得といった個人の利益が目的となっているものが多いと感じている。第二の公共事業と揶揄されても仕方がないのではないか。(大企業の代表等,教授,部局長等クラス,男性)
- 219 研究開発の内容について,国をまたいで検討を進める際,現在の輸出規制や税務対応等のしくみは足かせになりかねないのではないかと危惧されます。研究活動を推進し,現実的に守ることのできる制度を分かりやすく再整備していただきたいです。(大企業の代表等,准教授,主任研究員クラス,女性)
- 220 「科学技術」という質問の範囲が曖昧に感じており,回答に苦慮します。特定の分野では十分でも,通信,ネットワークビジネス,インフラでは著しく不十分など,質問が画一的すぎるように感じます。今後の生活基盤となるであろうデジタル領域での活動,理解が欠如していると感じており,ここには強い危機感があります。(大企業の代表等,その他,男性)
- 221 社会課題に対する研究者の取り組みは,分野による温度差が大きいと思われる。(大企業の代表等,その他,男性)
- 222 異常気象や地政学的なリスクがここまで顕在化しており,さすがに研究開発テーマもこれらリスクを意識したものが多くなってきている? 取り上げられている? 地政学的なリスクでは米中分断による(中国による知財,データの囲い込み)立ち位置の確認は各研究者も意識しているものと理解している。(大企業の代表等,その他,男性)
- 223 国益を考えた施策が必要(大企業の代表等,その他,男性)
- 224 産学官が連携して,研究開発の成果に基づいた標準化(フォーラム標準・デファクト標準・デジュール標準等)を進めるには,国際標準化などを実際に行った日本国内のメンターを財産として大切に,彼らがどのような連携をしながら,どのような成果を得たのか,また国際間や企業間での利害や知財関係を含めてどのような問題に直面し,どう対処することでデジュール標準を達成したのかなどを理解するとともに,産学官に利活用すべきと思います。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等,学長等クラス,)
- 225 将来イノベーションを起こす可能性のある基礎研究テーマは,社会的課題が生じてくる前に着手することが多いように思う。目先の成果を求める研究テーマを支援する必要もあるが,長期的視点の優れた研究テーマを拾い上げる仕組みが必要に思う。大学等で行われる学術研究と企業研究とは視点が異なって良いと思う。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等,学長等クラス,男性)
- 226 研究者の多くは独自性を求め,わずかな資金をできるだけ有効に使うと努力している。国際連携も,その中でなんとかしようとしている研究者も多い。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等,学長等クラス,男性)

- 227 分野によるのかもしれないが、学会は現代の社会に於いて必要なかどうか怪しい。起業家へのサポートは過去に比べてだいぶよくなってきているが、起業したいという若手を生み出す土壌が無い。大学の研究者は研究だけでできればいいという採用基準なので、幅広い分野を学習することだけでなく、それを学生に教育することができていない。研究上の国際連携はできているように思えるが、外部の人間からすると「それは外為法違反では？」みたいな話によく聞く。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 学長等クラス, 男性)
- 228 科学技術をもとにしたベンチャーの起業・経営の観点では、リスクマネー以外にも、適切な人材の流入も必要と感じる。また、各企業の成長段階に応じた支援も必要と感じる(芽が出て伸びないなどへの対策)(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 学長等クラス, 男性)
- 229 国家間の緊張関係などを考慮して国が主導して研究者にガイドラインを示すか、国が戦略を示す必要がある(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 学長等クラス, 男性)
- 230 問5-3ですが、なんというか、やりすぎです。研究者に会うと、これはこんなに社会に役に立つ、とばかり。実態はどうか分かりませんが、社会的要請(そういうものがあるならですが)を受け入れているポーズを取りすぎです。役に立つことだけを求めるのはよろしくないと思います。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 学長等クラス, 男性)
- 231 知財管理・導出管理を大学自らが行っていない(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 学長等クラス, 男性)
- 232 研究コミュニティの学会発表が、身内での発表で、オープンになっているとは思えないので、現状が分からない。これだけ、YOUTUBEをはじめ、世の中に情報を拡散するツールはあるので、もっと、庶民にわかりやすく、展開して欲しい。イノベーションが起きているのか？にたいしては、起きているとは思えない。もっと、企業の人間が入り込むべきか、個人で入るべきなのか、民間との協力が必要だと思う。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 教授、部局長等クラス, 男性)
- 233 高齢化社会の課題を解決できるイノベーションを期待したい。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 教授、部局長等クラス, 男性)
- 234 学際研究に関しては、特に若い研究者を中心に意識が定着してきており、また学問の垣根を超えた交流を行うことに抵抗がない研究者も増えていように見受けられる。一方で、特に高年齢の研究者には未だに自身の学術領域に固執する傾向がかなり高いようである。また、国際連携や利益相反・責務相反については、研究者側の理解がまだ少なく、かつ自分のこととして理解しようという傾向が低いようにみられる。通り一遍の教育ではなく、研究者が研究者として立ちまわっている段階でのしっかりとした教育システムを構築すること、また経歴が長い研究者に対してもいわばリメディアル教育として最新の動向を伝えていくようなしくみが必要である。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 教授、部局長等クラス, 男性)
- 235 研究者や機関連事務員の「利益相反」についての理解は、「あることは後ろめたい」であり、「成果の開発において重要な仕事をし、評価されている」との考えがない。記載場所がないので、ここにかきます。産学官連携活動の問3つの2、3には印がつけられません。私の答えは全て1番に丸です。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 教授、部局長等クラス, 男性)
- 236 イノベーションを推進するための整備は不十分であると感じる。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 准教授、主任研究員クラス, 男性)
- 237 研究コミュニティ(学会等)が、社会的な使命に応えていないと思います。研究者の業績を披露する場になっており、自目的なモノに過ぎないように思います。社会にどのような視点から貢献できるのかが曖昧になっていると思います。少子化や気候変動対策は、私が幼いころからも言われていますが、その成果として大きく変わったかという目に見えて現れていないと思います。また、「既得権」の撤廃を掲げた「規制緩和」も「大手企業に有利な規制緩和」がなされることで、中小企業、零細、ベンチャーにとっては、レッドオーシャンになり、さらに厳しい状況になっていると思います。情報収集をされる相手は、いつも名前が知られた方々であり、その方々が「既得権者」であることから、「規制緩和」の効果的な緩和になっていないように推察しています。補助金も補助金の取得のために、コンサルタントを用いる会社もあり、その得た補助金から手数料を支払形式も横行しております。資金の補助を目的としているにも関わらず、補助金を得るためにお金を用いる会社は、補助金を申請すべきでないと思います。そうでなければ、資金もない弱者は、補助金においてもスタートラインが異なっている現実があることを解っていただきたいと思います。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, 助教、研究員クラス, 男性)
- 238 前の設問と重複しそうなので、そちらを参照いただきたいと思います。私は、人類に役立ち、いずれはポピュラーになる研究成果が必要不可欠の生きた研究と思っています。ですから、そういった活動をいかに発信し集合させていけるかが大事だと思います。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, その他, 男性)
- 239 研究者の能力やスキルにばらつきがあり、良し悪しが人によって明確に違う印象である。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, その他, 男性)
- 240 国際に関することや研究者の利益相反、異分野との連携に関することはわかりません。社会で話題として大きく取り上げられている少子高齢化や気候変動や感染症などの対策に研究者が取り組んでいることは良く耳にします。イノベーションを引き起こす科学技術も必要と思いますが、以前からある社会的課題(光回線の環境がない地方をどうするか、インターネットの利用での危険をどうするか、振り込め詐欺の防止をどうするか)を解決する方が重要であると思っています。(中小企業・大学発ベンチャー等の代表等, その他, 男性)
- 241 キーワードが十分に定義されず、研究者間で理解されないで用いられている(イノベーション, Society5.0, 総合知, オープンイノベーションなど)。この状況を変えるために、研究者自身が相互に議論し、どのような環境をつくるべきかを政府側からでなく自らの力で作らないと、いつまでも海外の模倣であったり、異なる理解による表層的な研究方針に若い人をつき合わせるのは極めてまずい。(俯瞰的な視点を持つ者, 学長等クラス, 男性)
- 242 異分野が協働する取組(人文・社会科学と自然科学の協働も含む)は重要と思われる。これに関する先進的取組にさらに支援をしていただきたい。総じて、予算配分が、従来の「理系」優先になっている気がする。(俯瞰的な視点を持つ者, 学長等クラス, 男性)
- 243 国際化、特に国際標準取得のためには、相当な人材の投入が必要だが、それが小さな予算、限られた年度で行われているため、アカデミアが中心となりにくい。総合知やオープンイノベーションについては高等教育の入り口、あるいは初期から教育等の取組が必要。(俯瞰的な視点を持つ者, 学長等クラス, 男性)

- 244 科学技術・イノベーションの活動は多くの地域自治体や公共団体が推進しようとしているが、その活動や市民の巻き込みが広く社会に発信されているとは感じられない。従来の自治体ホームページへの掲載だけでは不十分で、SNSなど現代的なデジタル技術の活用が求められる。このような発信、広報活動にはその分野に長けた若い人材の登用が必要であると考えます。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 245 イノベーションでは2-3年後の研究の予測は立てられません。あまりに計画性の強い研究は失敗します。未来開発型のムーンショットや未来社会創造プロジェクトは予測は大きすぎて、つまらない末梢研究に終わる可能性が非常に高いのです。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 246 さまざまな面で自然科学と人文・社会科学の連携を模索する動きは出てきたが、多くは断片的・一面的で、総合的な観点から課題に取り組むケースはほとんどないと思われる。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 247 学界と社会との関係であるが、学会によっては緊密な関係をとるように努力し始めている。ただ、まだら模様であろう。一般に、研究機関・大学・学術界は社会に対して説明責任を果たす努力が足りない。その典型例は、「日本学術会議」である。正直言ってこれは不要である。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 248 十分／不十分と、強化すべきか否かは別問題であり、不十分だから強化すべきというアクションには必ずしもならないよう留意頂く必要があると思います。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 249 研究者そのものの国際性が乏しく英語でのコミュニケーションに問題がある。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 250 本パートにおける課題認識と大学等研究機関における組織的取り組みは進んでおり、個人の意識も高い。最先端技術の実証の場と活動実施のための制度整備の促進が必要である。品質チェーンの考え方を基軸にした戦略的に国際標準化を提案するメカニズムが未発達である。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 251 大学における社会へ向けた技術イノベーションや産業誘導に関しては、両者を取り持つアドバイザーが必要で、その人材の確保が遅れている。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、男性)
- 252 ・経済安全保障の面を十分に日本の大学や公的研究機関も認識する必要があるが、学術的な観点(学会発表等)と技術情報の秘匿とは相反するものもあり、今後、国が大学や公的研究機関に対して、ガイドライン等を構築して普及するとともに、学会発表等の前には国として相談できる体制の整備が必要であると考えます。・産学官の連携については、特に地方創生の観点からも更なる促進がされるとともに、海外の企業との産学官連携についての考え方も更に検討していただき、日本の経済が活性化される方向となる方策が図れることを期待する。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、女性)
- 253 文系理系分野を分けた功罪のために、日本では人文社会と理工系分野の連携が実現しない。特に日本の場合、理工系研究者の社会認識の不足が、大きな経済的損失を生んでいる。国際連携については、リスク面ばかりが強調されすぎ、相反等に関係しない基礎研究の研究者(特に若手)の国際離れを引き起こしているのがむしろ問題である。企業の研究開発投資の促進のための金融財政支援(政府調達、補助金、税制優遇等)を国は積極的に(早急に)進めるべきである。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、女性)
- 254 国際連携はまだまだ遅れていると感じる。先進的な大学とそうではない大学の差や英語の力量の差、また、日本への留学経験者に依存する傾向もあり、連携する相手が偏っている事例も多々見られる。本来の必要である、連携することで研究面で高い付加価値を生むような国際連携は限定的ではないか。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、女性)
- 255 (614)研究活動の国際化に伴って生じる利益相反・責務相反のリスク要因の知識は、もっと意識を高めるべきである(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、女性)
- 256 国際共同研究を進めるには、柔軟な研究費執行が必須である。(俯瞰的な視点を持つ者、学長等クラス、女性)
- 257 日本の各研究コミュニティは、国民の理解を得るための活動を精力的に行っているが、その手法が必ずしも効果的ではない場合がある。国がそのための支援(アウトリーチの手法、システムやスタッフ)を提供することができれば、もっと効果的に科学技術・イノベーションが国民に浸透するものと期待される。国際連携については、研究者の努力によってそれなりに実施できていると思われるが、制度というよりも国際的な人事交流、特に日本に外国人研究者を招へいする際のサポート体制があまり十分ではなく、研究者の個人的努力によるところが大きい。そのような支援環境の実態を整備することも重要な観点であると思われる。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、)
- 258 新型コロナもあり国際連携や産学連携は停滞している。企業にしてもスマートシティどころではないのが実情ではないか。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 259 国際連携や共同研究に関わる法的な観点からのガイドラインや事例集などがあると良いと思います。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 260 大学の国際化への取り組みは近年大幅に進展したと考える。しかし、公的研究資金については使途が非常に限定されており、国際大学連携の枠組みで日本から海外に行く場合は先方の受け入れ大学に宿泊・滞在費用等もすべてカバーしてもらえない一方で、海外から日本に来てもらう場合はその種の費用を手当てできない場合がかなりある。大学の内部規定が厳格すぎる場合もあるが、いずれにせよ、国際連携を構築するのに十分な仕組みがあるとは言えない。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 261 イノベーションは「人材の多様性」に尽きると思います。社会に展開されてそのイノベーションですので、文理融合などの研究分野の連携だけではイノベーションにはつながらないと思っています。例えば、企業でいうと、マーケティング、セールスといった方々とR&Dとが連携してこそ、イノベーションにつながると思います。このような人材の多様性を有する研究開発プロジェクトを推進していくことが大切だと思っています。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 262 国際共同研究を推進するために国際分担金などの支出が必要になる場合があるが、米国のような予備費を計上できないために原油価格変動に伴う電気料金高騰や為替変動に対応できない場合がある。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 263 コロナ下にあつて、国際共同研究は、著しく遅れた。研究者自身が、時間に追われ、あるいは、拝金主義の研究費獲得に陥り、社会貢献を考える余裕がなくなっているように思われる。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)

- 264 科学 = 知の創造(文・理ともに) 技術 = 創造された知を具現化するもの 研究 = 科学や技術を進展させる行為 開発 = 価値の創造(知の具現化) イノベーション = 新しい方法・考え方を社会に反映して新しい社会のあり方を実現すること(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 265 大学の研究者は、既存の狭い領域を深く探求する蝸壺型の研究に深く嵌まり込んでおり、それ自体を容認してきた日本のアカデミアの世界がある。決して悪いことは思わないが、社会課題解決、オープン化、イノベーション創出などといった観点にたてば、新たな研究テーマの設定や、より多くの異分野横断的な取り組みへの参画という新たなスタンスで自らの研究テーマを設定することが必要になる。それだけのマインドセットの転換を研究者自身に起こすためには、予算の付け方や、大学内での人事制度など、大幅に調整する必要がある。例えば、現在の大学のデニュア制は、何をしても定年まで安泰なわけで、現在の蝸壺研究の世界においても、新たなチャレンジを促すことはなく、再考の必要があるように思う。また、大学の中で教員に何らかの問題があった場合、教授を解任・配転することができない。結局は、大学経営陣に人事権と予算権がない、あるいはあっても形骸化しているからと理解している。組織を運営し、構成員にプロアクティブに働きかける上で、今の大学法人は、ほぼ機能停止状態と理解している。この辺りも含め、抜本的な大学の大改革が必要だと理解している。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 266 国際連携は分野による違いが大きい。基礎物理、宇宙や核融合エネルギーなどでは国際連携が密に行われているが、それ以外の分野ではこれらほど活発ではない。従って、国際連携をひとくくりにして質問することは適当ではないと思う。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 267 国際共同研究の場合、EUや米国は知財検討に関してかなり厳しい規制があるが、日本側は必ずしもそれに対応できるような組織あるいは専門家の数が十分でないのではないか。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 268 いずれについても、各専門・各セクターの視点の範囲において、それ以外とつながろうという努力は増えてきているという印象であるが、相手にしている専門あるいはセクターの立場を理解しそれに立脚した取り組みと言えらる段階にはない印象である。したがって、本質的なつながりには至っていないのではないか。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 269 社会との関係に関しては、この20年間に大きく意識改革が起きているが、まだ十分な成果にはつながらない。総合知の活用に関しては、異分野の研究者の交流の機会が少なく、不十分である。交流の機会を増やすことから始め、相互理解を促進する必要がある。1980年代、1990年代初めに経産省が行ったような、国策として重要となる最先端科学技術分野の研究開発促進を国が主導して産官学で推進するような取り組みを再度行う必要がある。さもないと、米国、中国に大きな差をつけられることになる。国際共同研究の推進に関しては、研究者のEUのHorizonやNSFのプロジェクトへの正式参加を、相手国と協調して制度として整備していただきたい。研究インテグリティに関しては、特に定年後の研究者の流出に伴う最先端科学技術情報やデータの国外流出に関して大きな危惧を感じている。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 270 TRLのように各数値の意味を例示してくれれば、より精度が上がる。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 271 全ての分野で同じ社会的要請があるわけもなく、思いつくりの社会との関連をあげて、全てを行わないといけないかのようなプレッシャーをかけても実りはないと思う。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 272 科学と技術は異なるものと思われる。科学技術とまとめて論じることに問題があるように思われる。科学の中には純粋な興味から行われるものと、社会課題解決にむけた取組をするものがあるバランスで存在しなければならない。研究費配分、評価などに戦略性がなく、事業ごとに定められる選考委員の意見に従ってバイアスがかかることもある。より広い視点での科学技術政策の立案が必要である。例えばAIがブームになるとその人材が少ないから、データサイエンスの強化を行うということが行われ、他の分野への投資が減ることが見受けられるが、より長期的な視野に立ったバランスが取れた議論を行い、実行する体制が必要であろう。また安全保障対応の業務が増えつつあり、研究者に対する負荷が増大しないように、国益を守ることができるシステムの構築が求められる。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 273 どれも難しい問題で、これからの安全保障を考慮した研究インテグリティ、これからの国際標準化とはどう推進するべきか、外国人留学生の受入に対して、基礎研究推進とノウハウなどの機微技術と情報流出などの問題はしっかりと教員、学生に教育を徹底した方がいいと思います。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 274 研究への支援やアカデミックポジションが不足し、頭脳流出が進んでいる。そして技術は他国のものとなってしまふ。日本の科学技術を下支えしているのは大学であるため、根本的な大学のあり方の見直しが必要だと思うが、根本的に学生一人あたりの教育予算を削減することは間違っている。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 275 6-12はCOVID-19の影響が大。全般に研究者の時間確保のためのもろもろがうまくいっていない。イノベーションのためには時間・精神・予算の確保が必要(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 276 現代社会において、科学は科学者のためのものではなく、国民のため、あるいは国家の為に必要である。科学の発展がなければ、国際社会の中で取り残されていだけであり、現在の日本の賃金が上がらないことも、これが遠因となっているように思われる。現在の日本の特に生命分野の科学研究体制は、おそらく危機的である。それが危機的に見えないのは、臨床応用されない基礎研究でいくつか光るものがあつたり、極めてまれに基礎研究からの創業が行われているためである。国家的視野にたつて科学が国家を支える、そのために体系的に支援体制をつくるという体制はできていないと考える。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 277 日本ではリスク回避メカニズムだけが異常に発達しており、冒険精神が完全に摩滅しているので、以上の設問自体が無意味です。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)
- 278 人文や社会科学のレベルが低く、優秀層の厚みが足りていないので、本当の意味で文理共創の仕組み作りをして、それを盛り込むことを要求する補助金申請書のようなものを用意しても、実効性のある文理共創は生まれてこない。一流の社会学者はほとんど一部の大学に集中しており、その人たちが興味を持つような文理融合のプログラムをつくらなければ実効性のある議論が出てこない。政府調達が重要であることは米国のイノベーション研究者も指摘している。しかし、ここについては、日本の仕組みについて知識がないので回答できない。オープン・イノベーションの言葉の使い方が本来のチェスプレーの指摘から、日本では大きくズレてしまっている。本来、大企業からスピンアウトした博士号をもつ優秀な科学者・技術者がベンチャーを設立しているので、大企業とベンチャー企業の共同でイノベーションが生まれてきているという議論が主軸だったのだが、現状の日本では大学と企業の間のみである。これなら、TLOの基盤程度で対応できる。今後は、博士課程に進学した学生がベンチャーを設立して、大学の設備を活用しながら初期段階を過ごし、その間に大企業とも共同研究が進み、後にIPOするか、大企業に高値で売却されていくexitを経験するという事例が多数出てくるようになれば、この種の問題が解決するはずである。それ故、一点突破するべきところは、大学発のベンチャーをいかに育成していくかということであると思われる。(俯瞰的な視点を持つ者,教授、部局長等クラス,男性)

- 279 「科学技術における国際連携」は、けっきょく個人の伝手頼みというレベルも多く、組織的な対応は十分でない印象がある。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 280 社会との関係は学会や個人のする内容ではないと思う。オープンイノベーション拠点とは何か不明。デファクト標準化を産学官が連携して進めることはない。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 281 問6-03で社会的課題を(少子高齢化、気候変動、感染症等)と記載すると、著しく、ミスリードすることにつながることにご留意願いたい。もっと、懐の深い、根深い社会的課題、自動化の畏、相互依存性、リスクトレードオフといった視点がクローズアップされるべきでしょう。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 282 研究者個人は、社会的な課題解決や社会的貢献を考慮して研究を行うケースが多くなっている。ただし、研究コミュニティ(学会等)は、その学術分野の発展と研究者へのサービス提供が主たる生業なので、社会貢献は二の次となっている。学会運営も、会員減少と共に厳しいものとなっている。学会の様々な活動はボランティアベースなので、多忙化の中で社会貢献の業務まで行う余裕はあまりなくなっている。異分野との協働は加速しているが、まだ十分とは言えない。イノベーション促進の環境整備はまだまだ不十分である。実証実験の場合は増えつつあるが、実証実験で留まってしまい、社会実装までつながらないケースが多い。協議会などが増え、オープンイノベーション拠点の整備や標準化などが若干進みだしている印象があるが、まだまだ十分とは言えない。国際連携プログラムも徐々に増えつつあるが、これについてもまだまだ十分とは言えない。安全保障輸出管理の重要性が増している。利益相反・責務相反のリスク要因に対する意識は高まりつつあると思われるが、大学や研究者によってかなり差があると思われる。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 283 我が国の研究成果がイノベーションに十分につながらない要因について、突っ込んだ分析が大切に思われる。現在、様々な施策が実施されているが、それらが一層、効果を収めることが望まれる。今日では、イノベーションは、社会システム(エコシステム)によって創出されており、例えば、人材の流動性や、機関投資家を源泉とする資金の投資など、一見、イノベーションと関係が薄いと見えるファクターが大きな役割を果たしている。従って、個別施策に加えて、包括的なビジョンと施策が求められているのではなかろうか。我が国で進められている『オープンイノベーション拠点』の整備は、重要な前進を収めている。しかし、ドイツのフランフォーファー協会と対比すると開きがある。先行する好事例に学び、場合によっては大胆な改革が望まれるのではなかろうか。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 284 論文数、論文引用数で業績を測り大学ランキングを語る一方で、分野横断、文理融合、社会実装、オープンイノベーションという評価軸をさらに付加的に並べるのは無理がある。これらを1人で全部やれというのは無理なので、ポートフォリオを作り、承認されて公表するようなことをしないとダメ。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、男性)
- 285 問6-11に関して、例えば、PCのプリンターにおいても、多くの型を作り、互換性のないインクを販売することに日本の産業界の問題点が表示されている。また、電子カルテにしても、全国一律に患者情報の共有できる体制や、日本における疾患医療統計が容易にできる体制が欠如している。利益相反に関しては、国際共同研究の場面で、日本の大学等の組織がむしろナーバスになりすぎているために研究における抑止力・抑制につながっている印象も受ける。企業との共同研究は良いことではないと考える管理者さえいることも問題である。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 286 日本の大学や公的機関と、国際的な視点で比較する対照をどのようにとらえたいのかわかりませんでしたので、主観的な意見になりました。なお、研究者が「国民の理解」を得るための行動は、ごく特定の「国民」に届く内容になっていることが多いので、国民の対象を広く設定して、研究者の理解を国民からも得るようにコミュニケーションが可能になるよう期待したいです。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 287 日本においては、一度ルールを制定すると一律重要なものもそうでないものも同じ取り扱いとなり、例えば書類の量が一律に増える。よりメリハリの利いた運用が必要である。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 288 研究インテグリティについては、2015年4月の各大学・研究機関での実施から数年を経て、2015年段階で求められた規定改正や制度整備とは異なる段階に移行しつつあると考える。研究不正の内容も複雑化しており、日本における研究全般の質的向上の観点からも、日本でのインテグリティ意識は現状では不十分であると言わざるを得ない。「次の段階」とは何かを含めて、考えるべきだと思う。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 289 社会との関係性や総合知、国際連携は一般的に重要であると考えているが、イノベーションに関しては関わる分野とそうでない分野がある。研究インテグリティのトピックは、研修等でより知らせられると良いと思う。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 290 産学連携、国際連携、研究インテグリティを担う専門家(URAやコーディネータなど)は、今後の大学経営の実装のため必要不可欠な人材であるが、これまでの経緯で、雇用財源を時限外部財源に頼っている状況。その事業終了とともに、雇用が途切れることも多々あり、優れた人材が活動しつづける環境は全く整っていない。学長など執行部も大学ランキングなど当面の指標に縛られ、当該人材の長期的雇用に対応できない。抜本的な改革を国レベルで進めるべき。そうでないと、研究資金を入れても、もはや研究活動がすすまず、ますます日本の研究の地盤沈下が進む。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 291 科学技術・イノベーションと社会の連携については、研究分野により全く異なると思われる。前の問いでも書いたが、通信・情報技術、あるいは医薬分野、気象・地震など社会生活に密着した分野はある意味、社会活動と直結しており、他分野(社会学、防災学、保健・疫学、パンデミックなど)と密接な関係が構築できていると思われる。一方で、医薬における電子カルテなどの共有など、社会のルール(特に「法律」と関連する部分に関しては、国際連携以前に国内においても長期間の議論が続いていると思われる。著作権、個人情報保護法など、国際連携において欠かせない「法律」関連など、我が国は「文化的なコンテンツ(例えば、アニメや漫画など)」も多く世界に認められており、世界の趨勢にあわせて、迅速な整備、改定を可能とするメカニズムが必要と感じている。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)
- 292 文理融合については、幅広い研究者に対してなるべく機会を増やすことは確かに重要で、多様性にも結び付くと思う。現状ではやや、興味のある研究者の自助努力に委ねられている印象もあるが、時間に余裕があり意欲がある研究者にとっては機会が多くなっていると感じる。ただ多くの研究者はもはやそのような余裕がなく、予算獲得の必要に迫られて体制を整えるケースが多そうなのは注意すべきかもしれない。産官学連携は大型プロジェクトの場合、目標設定が企業に大きくシフトしてイノベーションからは乖離するケースもありそうである。国際連携について、日本はそれでも極端にはずれたところを行っているわけではないという印象はある。(俯瞰的な視点を持つ者、教授、部局長等クラス、女性)

総合知については、さらに明確な支援を行う必要があり、現時点では旗印だけ先行しており実が伴っていない、イノベーションに関する規制は、著しく不合理なものが多く、資金ルールでも「ルールに従うことが目的」となっている運用例が多すぎる。「絶対に不正を起こさない」というそもそも不可能な前提ではなく(この方式である限り、不正が起こるたびに弥縫的な規制が増える)、「不正を起こした際のペナルティ」を大きくして「起こりうるけど起こった際にしかるべき罰を受ける」という応報式にすべきである。(俯瞰的な視点を持つ者、准教授、主任研究員クラス、男性)

問6-01(601)に関連して、大きな学会は学術集会などに合わせて、アウトリーチイベントをやっている場合が多く見受けられ、理解増進に向けた発信はそれなりにやってきたと思われる。しかし、受けての市民側の「聞きたい」欲求に積極的に答えられてきたかという点、不十分と言わざるを得ないだろう。その意味でも「双方向性」のあるものでなく、一方的なコミュニケーションに終始している印象。「聞いてほしい」「聞かせてほしい」がうまくマッチできるような、支援の仕組みの構築が期待される。問6-02(602)に関連して、対話型のワークショップを学会が行っているのは見たことがない。一方で、小中高校の生徒向けに「理科教室」的なものを行っているケースはある。これは共創とはいえないと思うが、また、大きな学会組織は地域支部をもっている場合が多く、支部のイベントとして理科教室や、学校のイベント開催に支援をするようなことをやっている場合はある。このあたりをもう少し発展させて、何かできないか。学会によっては、民間企業が学会会員であるので、産学連携は自動的に起こりうる。会社のCSR/CSV活動と合わせて、多様な主体との共創や研究活動、例えばシチズンサイエンスの推進は可能と考える。この場合、学会が主導ということで、サイエンスリテラシーの向上や、研究倫理教育の徹底の効果も見込め、非常に意義深いものとする。問6-03(603)に関連して、医歯薬農工の分野の研究者は、もともとそういうマインドをもってはいると思う。一方で、本当の社会課題解決には距離を感じていたり、適当なパートナーや研究予算がないと取り組みにくいため、限られた時間や研究資源の中では、実践まで至らないことは多くあるのではないかと思う。この観点では、国際連携ももっと推進できると思うが、小・中規模のものを進めるのは大変やりにくい印象。財団の助成金レベルの金額でも、進めやすくなる場合があると思う。問6-04(604)について、分野によるので答えづらい内容なのではないか。私の研究は単独でも複数分野にまたがる内容である。一人でやっても、異分野連携と言えるのか？(もち【続く】)

ろん共同研究も常に展開している。)特に萌芽期の異分野連携研究は成果が出にくい上に、研究予算も(信用がないために)取りづらいという現状がある。もたついているうちに海外に出ればかかたり、後発だがフォーメーションをうまく組んだ国内のコンペティターに先を越されてしまうこともある。このようなチャレンジに寛容な、研究予算が増えてほしい(挑戦的研究の萌芽のみならず、開拓も採択率をあげてほしい)ところもある。現状では、一つの分野で1件程度で、これではなかなかタイムリーに行き渡らないと思う)。問6-05(605)について、基本的に社会課題の解決なら異分野連携が多いとは思いますが、単独分野でも我田引木的に研究開発を実施(予算を獲得)している人もいと思う。問6-07(607)について、大企業の安定性が著しく、雇用者数が多すぎる現状では、ベンチャー志向にはなりづらいのではないか。小手先の支援だけでは革命的に数を増やすのは難しい気がしてしまう。科学技術をもとにしたベンチャーであっても、科学者はアドバイザーぐらいの関わり方で済むようなスタイルが増えてほしい。問6-10(610)について、官では、特に地域行政の絡ませ方が難しいような印象。大学で作っても、そうかんたんに産が乗って来てくれず(興味は持っていない)、営業活動に苦勞している。産だけでなく、民の協力も必要。そういう場の設定がうまくできているところは少ないかもしれない。問6-11(611)について、例えば、プラスチック問題に関連して、ヨーロッパの動きには全く遅れていると言わざるを得ない。日本の場合、押し付け合いになるか、うまく手をつなげないか、産も学もそれぞれバラバラ、官もそれをまとめる専門性もファシリテート能力もないような印象。このままでは国際的な標準化策定の中で、負けが続くことでしょう。強みも弱みも出し合いながら、適切な連携や協力体制が作れる場作り、そして、そのような場を回せる人材の育成も課題であると思う。(こういう場所に博士人材やサイエンスコミュニケーターの活用が可能だと思います。)問6-12(612)について、基本的には科学者は国際的な【続く】

コミュニティにつながっていると思われる。十分か、と言われると、そうではないと思う。最近では若手の国際派遣が活発化しているとは思いますが、コロナ以前、留学や在外研究がしばらく時期があった印象(サポート不足ゆえに)。その分、ネットワーク構築で中国や韓国に負けている面はあると思う。逆に、受け入れている留学生が増えており、日本を起点にしたネットワークはたやすく構築できるようになったとおもう。結果として、アジア偏重になっているが、これはこれで持続させて生かしていく必要がある。しかし、戦略性は乏しいと思う(数の問題だけではない)。例えば、卒業後も日本の共用設備にアクセスしやすしたり、それをきっかけに日本の製品を売り込んだりする機会として活用することももっと考えて良いと思う。そのためには共用設備は拠点化していることが望ましい。問6-14(614)、問6-15(615)について、何か海外の大学や民間企業と関係を持つ際には、すぐに大学の法務が出てきてくれるので、組織的な取り組みはなされていると思う。一方でよくわからない書類を準備させられるため、仕事が滞って困る。(俯瞰的な視点を持つ者、准教授、主任研究員クラス、男性)

295 仕組みや機会は増えたとは感じるが、成果の評価には時間が必要である。(俯瞰的な視点を持つ者、准教授、主任研究員クラス、女性)

296 ・研究コミュニティ(学会等)によるリーチアウト活動は、定着してきているが、一部の取組にとどまっていると感じる。・問6-02研究コミュニティ(学会等)が地方公共団体、NPO/NGO、市民等の多様な主体と共創して研究しているか、問6-03研究者が自らの研究の社会的な意義・価値を十分に考慮しつつ、研究に取り組んでいるかは、コミュニティによって大きく異なり(社会との距離に近い分野では活発だが、そうでない分野では不十分)、平均しての回答は困難なため、「3」と回答した。・第6期基本計画で提唱された「総合知」の活用はまったく不十分である。・オープンイノベーション拠点の整備に向けた産学官の取組の状況は、大学・公的研究機関によって、分野によって、大きく異なり、平均しての回答は困難なため、「3」と回答した。・研究インテグリティへの意識や取組は、緒に就いたばかりと考える。※本パートだけ、回答画面が非常に長くて回答しづらく、回答モチベーションも保ちにくいので、画面をいくつか分割していただくと有難い。(俯瞰的な視点を持つ者、准教授、主任研究員クラス、女性)

297 「総合知」を高める取り組みが為されている事例は承知しているが、これを深め、広めることが重要と思料(俯瞰的な視点を持つ者、その他、男性)

298 国家予算による国際共同研究では、相手国の人材の人件費等をカバーすることができないのが現状である。途上国では優秀な自国研究人材の確保や雇用が難しいのが実態であることから考えて、プロジェクト研究費のより柔軟な運用方策が必要なのではないかと考える。(俯瞰的な視点を持つ者、その他、男性)

299 問6-01～05に関しては、それが進んでいるコミュニティと、進んでいないコミュニティとの落差が激しいような印象を持っている。分野や地域に関わらず、同じレベルで進めさせる意識と施策の共有が必要ではないか。(俯瞰的な視点を持つ者、その他、男性)

300 日本は総論賛成、各論反対の立場をとる組織・個人が多く、軍事転用の可能性などにも無頓着な研究者が時にみられることが残念と感じます。(俯瞰的な視点を持つ者、その他、男性)

- 301 分野融合や異分野連携, さらに, 国際連携は, 研究者自身が必要と思わぬ限り, 無理矢理に進めても学術的な成果をもたらさない。論文引用数増大のために無理矢理国際プロジェクトに加わることをもめるような昨今の風潮は, なんら本質的な日本の研究力にならない。大学(実際は高校にまで遡る)において広い視野と広い基礎学力を身につけることを確保しない限り, 先にいって異分野連携や国際連携などを求める研究者は増えない。研究力低下の原因のすべてを大学に押し付け短期的な大学ランキング向上や論文引用数増加を求める国(CSTIIおよび最近では財務省まで)の考え方が, 大学に空回りをさせ, 大学等における研究と社会との関係の本質的改善を妨げている。(俯瞰的な視点を持つ者, その他, 女性)
- 302 個人差はあるが, 研究者は自らの専門分野, コミュニティに引きこもり, 自らの研究の社会的な意義・価値や異分野との連携・協働についての認識が十分でない傾向がある。課題も多いとは思いますが, 異分野との連携を強化し, 研究の社会的以後の認識を深めることが, 博士課程後期の充実, キャリアパスの多様化につながるのではないかと。(俯瞰的な視点を持つ者, その他, 女性)
- 303 日本は, 国際連携に本気で取り組む必要がある。コロナ禍のなかで, ネット授業やネット会談, ネット国際会議も当たり前になってきており, 英語での論文と議論ができる人材の育成は急務であるMUSTである。同時に海外からの留学生や研究者を良い条件で受け入れることが大切である。この分野でも中国に買っている。(俯瞰的な視点を持つ者, その他, 女性)
- 304 コロナ禍のために, 各種取組のオンライン開催が浸透した。それは, 社会におけるさまざまなステークホルダーとの間の情報共有, という側面からは, 良い方向になっていると思う。日本は, 「国際化」に遅れているだけでなく, それにともなうリスク要因に無頓着, という状況は, 研究者に限らず, 国民, 政府, すべてに, あてはまる。抜本的な啓発活動が必要, と思う。(俯瞰的な視点を持つ者, その他, 女性)
- 305 利益相反・責務相反リスク等に対して, 十分な認識がなされていないような印象があります。(俯瞰的な視点を持つ者, その他, 女性)